鬼狩りのアテネ

ただのこうら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼狩りのアテネ

【Ｎコード】
Ｎ８６６９Ｓ

【作者名】
ただのこうら

【あらすじ】
そこは「魔法少女」、「鬼」、「能力者」などといった異界の者が存在する世界。平凡な（になろうとする）青年：神内真理（じんないしんり）と魔法少女：竜崎アテネ（りゅうさきあてね）が数々の困難を乗り越えていく物語。

誰しもが過去を抱えながらも今を生きている。自らの希望を力に変え戦う魔法少女。世界の負の力を自らの根源とする鬼。人でありながら人とは違う異能の力を持つ能力者。

彼らは何のために存在するのか。何のために戦うのか。何を守りたいのか。

そして、物語は始まる。
鬼を狩りし者がその力を目覚めさせる。
守りたいモノを守るため。

＊更新がだいぶ遅いですが気長にまっててください。

プロローグ（前書き）

この話はフィクションで、実際の地名・名前・その他もろもろとは関係ありません。

プロローグ

辺り一体は真っ暗闇だった。ただそこには闇が広がっていて、何もないそんな空間だった。どうやら“私”は浮いているようだ。

（まるで、海の奥深くでぷかぷかしているみたいだ。）

ぷ～かぷ～か……

それにしてもここはどこだろうか。息はできているから海の中ではない。ここにいる前には“私”はどこにいたのだろうか。……ダメだ、思い出せない。頭の中に黒いもやがかかっているようで何も思い出せない。そもそも“私”がなんだったかさえ思い出せない。“私”はぼけてしまったのか。

真っ暗闇な世界の中で“私”はどうすることもできなかった。そもそも自分自身が何者か覚えていないのだ。“私”の心の中は絶望で覆われていた。せめてわずかな光さえあれば希望を見出だせるのになと思った。こんな暗闇の中では何もできやしない……

その時

スーッ

と一本の光が暗闇を切り裂いた。タイミングのいいことだ、まったく。だがこれはありがたかった。

“私”は無我夢中でその一本の光を掴んだ。しかし、“私”はとんと失念していた。今の今まで暗闇の中にいたのだからわずかな光さえも太陽のごとく眩しく感じる。さて、問題だ。この光がもとも太陽よりも眩しいとどうなるか。

……そして“私”の目は潰れた。あまりにも眩しすぎた。痛い、目が焼けるように痛い。目を潰した代償に二つほどわかったことかあった。一つはここでは眩しいものに近づくだけで目で見ているの

と同じく感じるということだ。だから光を掴んだだけで目が潰れるという事態が起きたのか。そしてもう一つはその光は掴むとフカフカしていた。なんか気持ちいい、目が痛いけど。もふもふ……で、これはなんなんだ。何かわからない。

「聞こえるか」

いきなり声がした。どこからそんな声がしたのか。周りを見ようとも目が潰れていて見えない。それにしてもかわいらしい声だった。

「どうやら聞こえているようだな。」

どうやら頭の中から声がするようだ。かわいらしい声だが口調はぶっきらぼうだ。きっと姿はちっちゃくて可愛らしんだろうな。

「黙れ、変態。」

思ったことが相手にもわかるようだ。しかしなんで怒られたんだろう。……そんなことよりも彼女は何者なんだ。

「うーん、思ったよりもこの“谷”は侵食が早いな。早くここから出るぞ。」

へ、“谷“ですか?なんだそりゃ。

「まず、貴様が自分を思い出さなければならない。そうでなければここから出られないからな。」

言っていることは理解できないが思い出せないのは事実だ。というよりなんでそんなこともわかるんだ。

「貴様の名は神内真理(じんないしんり)で、職業は男子高校生で、えっーと家は公営の墓地の隣。家族は……父親は出張していて家には働いている母親がいるのか。」

そうか俺は男か。一人称からあやしくなっていたぜ。そうかそうか、だんだん思い出してきた。自分が何者なのかだいたいわかった。

そう、なんかさっきより頭がしゃっきりしてきたな。
「趣味は読書と人間観察だな……いややけに女の尻の様子が映ってるな。まあそれはどうでもいいか。　で、机の2段目の引き出しの二重底の下に○○があるんだな。ふん、やっぱり貴様は変態だな。」
なんでそんなこと知ってるんだ。たぶん俺は周到に隠していた秘密だぞ、それ。母親にばれたらどうするんだ、せっかく集めたものなのになぁ。まぁその秘密のおかげでほとんど思い出したけどな。
「なんで知ってるかって?貴様の記憶の中をほじくりだしてみただけだ」
……ってことは記憶がなくなってなかったということになるのか。じゃあなんで俺はまったく思い出せなかったんだ。
「それについては後で話す。自分を取り戻したのなら戻るぞ。」
しかし、どうやって?
「その掴んでいる光をたどれ。そうすればここから出られる。」
なるほど辿ればいいんだな。
「そうだ。また侵食が進む前に速く出るぞ。」
そして、俺はこの陰気臭い闇の世界から逃げるべく光を辿った。

~現実世界~

気が付くと真理は墓地の近くの公園に立っていた。日はすっかり暮れ、夜のうすら寒さが真理の意識を完全に覚醒させた。
(そうか、公園の端っこの方で俺は呆然と立っていたのか。学校が終わった後すぐに公園を横切って帰るからどうやら4時間近くこ

こで突っ立っていたことになるのか。

そもそもなぜ俺がこんなところで無意味に立っていたのか。それは先程のせいだろう。闇の中に引きずり込まれて閉じ込められたのだ。もちろんそんな空間はこんなところにぽっかり開いているわけがない。だから俺は先程の現象を異空間に引きずり込まれたと結論づけた。異空間というのはにわかに信じられないが、先程のことは現実のはなしであるし、それ以外では結論づけられないしだ。そもそもこの世界には不可解なことが多い。最近あったことは神隠しだ。まさに俺の身に起きたこのケースと似ている。突然人が何かに連れてかれたかのように消える……）

そして、真理は先程自分が巻き込まれた現象から助けてくれた一人の少女（少女であろう）のことを思い出した。彼女に会いたかった。それが変態的な意味ではなく、純粋な意味で会いたかった。そう、一言お礼を言いたかった。助けてくれなかったらそのまま帰ってこれずに神隠しといわれていただろう。

しかし、いくら神内がお礼を言いたくとも見渡す限り人一人いなかった。回りをキョロキョロ見たがだれもこの公園にいないようだった。

その時、頭の上にある木の枝がガサガサと音をたてて、何かが落ちてきた。真理は落ちてきたものを無意識のうちに手を伸ばし、“それ“を抱きかかえた。“それ“はちょうど両手でかかえられるぐらいの大きさで、ふにふにと柔らかく人肌のように暖かかった。思ったより重さがあったが……それにしても揉み心地がよかった。抱きしめたいくらいだ。

まだ頭がしっかり動いていない真理は自分が思うままに目の前の“それ“を抱きしめた。

ぎゅー

ギャー

抱きしめた途端“それ“に殴られた。

「変態、いきなり抱きしめるな。」

その少女は真理の腕から逃れるとすくっと立ち、腰に手をあてて抗議の声をあげた。

（どうやら女の子だったようだ。それならいきなり抱きしめた俺は変態だな。）

「悪い。まさか女の子だと思わなくてね。頭が混乱してて思わず……」

「はぁ、こんなことになるんだったらさっき助けない方がよかったかもしれない。」

「だから悪かったって・・・えっ、さっき助けない方がって。」

「あら、覚えてるかと思ったけど覚えてなかったのね、“能力者”、いや変態。」

そう、目の前にいる少女が先程助けてくれた女の子だった。

目の前に威風堂々と立つ少女は、あまり背の高くない神内の肩ほどしか身長がなく、体重はかなり軽い。髪の明るい赤紫色で、背中までその綺麗な髪を垂らしていた。服はセーラー服のような白系統の服だ。

「覚えているいないってあのさっきの闇のなかのような異空間のことなのかい？

というよりも“能力者”って何？」

「まったく、質問は一つ一つにしなさい。
ふぅ、さっきの闇は、“谷”ね。“谷”っていうのは呪いや絶望や障気といった負のエネルギーが集まってできた空間の穴のようなものね。」
（なるほど）
「ということはあちこちにその“谷”っていうのはあるのかい？」
するとその少女は遠い方を見て言った。
「そう、ここのようにあちこちに“谷”がある。」
「ということは神隠しはこれが原因なのか。」
「あら、神隠しって呼ばれてるの。」

そこでその少女は顔を近づけて低い声音で呟いた。
「本来なら貴様の記憶を消してでも隠しておく話だがな。」
（……ということは俺の記憶消されるぅ！！）
「やっ、やめてくれ！」
「案ずるな、消したくとも消せない。」
真理は疑問を覚えた。
（えっどういうことだ。できないっていうのはどういうことなんだ。俺は普通の人のはずだ。単に技術的にできなかっただけではないのか……）

～時間をおいて～

「うー」
どうやらもう一度記憶を消そうとしているようだ。
すると少女の手から光が真理に向かって伸びた。そしてその光は真理の体を包み込んだ。

「よし、成功だ。」
その声が真理の耳に届くとともに目の前が光で覆われた。
（そうか、記憶が消されるのか。）
そして真理の意識が一瞬とんだ。

睡魔のような失神から一瞬にして覚醒した。
目を開けると目の前には先程同様少女が立っていた。
そして真理はその少女にこう言った。
「で、記憶なくならないんだけど」

～さらに時間をおいて～

真理は今までの話を考えた。
（どうやら少女によると俺は“能力者”らしい。記憶喪失の術をかけて記憶がなくならない者は強い“魔法少女”と“鬼”と“能力者”だけらしい。
……ってかなんかわからない単語が多いな。）

「ところで君はなんなのかい？さっきから君が何者かわからないし、名前もわからないから呼びようがないし。」
すると、今までうなだれていた少女が立ち上がり意気揚々と言った。

「私の名は竜崎アテネ、魔法少女だ。」

プロローグ（後書き）

書き始めたため拙い文章です。間違っているところ、違和感のあるところがありましたら遠慮なく指摘してください。

＊5月7日に改稿しました。

＊5月21日に修正しました。

1話　魔法少女アテネ（前書き）

やっと1話書きました。

1話　魔法少女アテネ

今まで平凡そのものだった神内真理（じんないしんり）。
そんな彼がいきなり谷に飲み込まれ、絶体絶命のピンチに陥る。
すると、どこからか少女がさっそうと（声だけ）現れ、“谷”から出るのを助けた。
“谷”から戻り、神内は竜崎アテネと名乗る少女と再び出会う。
そして、これが新たな物語を紡ぎ始めた瞬間だった。

～場所を戻して～

「そうか、じゃあこれからアテネって呼ばせてもらうぞ。」
「にゃあ、いきなりにゃによ。気安く名前を呼ぶな。」
「わかった、竜にゃん。」
「全然わかってない！」

ぐふっ
真理は調子に乗っていて殴られた。

「で、竜崎。魔法少女ってなんだ。」
「まあいいわその呼び名で。魔法少女というのは簡単にいうと魔法を使って様々な怪異と闘う少女のことよ。」
（簡単に言った！いやそれくらい察しがつくだろ。）
「竜崎は魔法少女にどうやってなったんだ。白い異生物と契約してなるのか？それとも別のやり方なのか？」
真理はとある有名な深夜アニメを例に聞いた。
「そんなやり方もあるらしいけど、私は違う。あんな「僕と契約

してよ！」って言う白い生物ではない。
というよりそんなこと聞いてどうするの？」
真理はアテネに警戒された。警戒を解くために自分の気持ちを吐露した。

「竜崎のこと、もっと知りたいから。」

するとアテネの顔が赤くなった。
「にゃ、にゃにを言っている。いきなりおかしなこと言わないでよ！」
ポカポカ
アテネはそういう擬音語が立つように真理の胸を連続で殴ってきた。しかし、力はさっきよりも弱い。
（ほう、竜崎はこういう言葉に弱いのか。そうかそうか。）
真理はさらに言葉を重ねた。

「もっと君の体の隅々まで知りたい。」

・・・・・・

ぐはっ

真理は思いっきり殴られた。
（なにか間違ったのだろうか、俺。）

「ふざけるな変態。貴様の存在を消してやろうか…」
その言葉とともにアテネは光をまとい、服装が変化した。それまでセーラー服のような服を着ていたが、変身することでひらひらと

したレースであしらわれた全体的にかわいらしい紫色の服を身に纏い、手にはそれまでなかった、アテネの背の丈ほどある大振りの鎌を携えていた。

（確かにその服装は数多ある魔法少女のソレだ。竜崎が魔法少女というのに納得できる。

・・・しかし、手に持っているその物騒な大振りの鎌はなんだよ。

そんなもの持っている魔法少女なんて聞いたことない。普通魔法少女ってステッキとか弓矢とか、せいぜい槍とかじゃないのか。

それが鎌とは……驚くよ、さすがに。）

「死ね。」

ズバッ

いきなりアテネは鎌で右袈裟切りした。重いはずの鎌を軽々と持ち、素早く切り掛かってきた。

「危ねえじゃないか！」

右側に大きく跳ぶことでなんとか避けることができたが、胴体があった位置を正確に真っ二つに切り裂いていた。避けていなかったら普通に死んでいる切り方だ。

「変態は死ねばいいんだよ。」

「いや、だから悪かったって。だからその物騒な鎌で切り付けるのだけはやめてくれ。」

・・・・・・

するとアテネはおもむろに鎌を下げた。

どうやら攻撃するのをやめてくれるようだった。

そしてアテネは言った。
「確かに丸腰相手にこのグリフィンで切り付けるのは後味悪いわね。
だから、［風よ、敵を射よ］！」
その一言（詠唱）によってアテネから、姿形は見えないが何か殺気のするものが撃ちだされた。
それは魔法だった。
その一撃は真理の目の前に落ち、地面をえぐった。
「次は当てるよ。」
「いやもう攻撃はやめたんじゃないのか。」
「だからグリフィンでの攻撃はやめたじゃない。」
そういいながらアテネは次の魔法攻撃の準備をした。
殺る気満々のようだ。
「さあ喰らいなさい。［風の精霊よ、敵に風穴を開けよ］！」
バシュッバシュッ
今度は1つだけではなく4、5発を一気に撃ってきた。さっきのは予行演習でこれが本気のようだ。
1つだけでもあの威力なのにそれが4、5発となるとおおかた丸腰である真理は死ぬだろう。
真理は無意識のうちに手を伸ばしていた。たとえ抵抗しても無駄なのはわかっているが、抵抗せずにはいられなかった。

ズダーン
5発中3発が神内の身体に当たり、身体に当たらなかった残りの弾が地面に当たり、土煙を盛大にあげた。

その光景を見ながらアテネは言った。
「これで懲りた？まあ当たっても気絶で済むし、最悪の場合でも死にはしないから。死んだらその不思議な力を調べようがないじゃない。」

そう言いながらまだ土煙の晴れていない真理の方へ歩いて来た。
そう、気絶している真理を回収するためである。
（ちょっとやり過ぎたかもね。あんなことされて頭に血が上っていたかもしれない。
次からは自重しないとね～）

土煙が晴れると、真理が立っていた。しかも、気絶せずに、服も一部は破れているが無事だった。

そんな真理はアテネを見ると歩いて来た。
そして、アテネの頭をぽかりと叩いた。

アテネは目の前の光景が信じられなかった。いくら手加減していたとはいえ、あの攻撃で気絶するはずだった。地面に開けた穴を見ると自分の力が弱った訳でないのがよくわかる。

しかし、なぜ真理は気絶していない……。

「まったく俺のこと殺す気か」

「なんで……、なんで気絶していないのよ」

すると真理は頭に疑問符を浮かべながら言った。

「なんか手を目の前に出していたら弾が爆ぜたんだけど。手の皮剥けたぐらいで済んでよかったよ。

いや、さすがに手加減するよな、当たってたなら気絶じゃなく死んでるしな。

ただ、次からそんなことするなよ。」

そう、アテネの放った弾は神内の手に当たると同時に爆ぜ、消滅した。真理はアテネの方が手加減してくれたと思っているが、何度もいうがアテネは手加減を一切していない。

詰まりのところ結論は一つしかない。

（何よ、アイツは私の魔法を打ち消したっていうの!?確かにさっきの記憶操作の魔法も効かない様子からも頷ける話だ。

だけど、そんな馬鹿げたチカラなんて見たことも聞いたこともないわ。アイツは何者なのよ……）

「アンタは何者なわけ？」

「いや、だから一般人だって言っているだろうが。」

（本人に自覚はないってわけね。

不気味だけどおもしろそうね。）

考え事していたアテネに真理は気になっていたことを尋ねた。

「そうだ、聞きたいことにまだ続きがあったんだよ」

「そう、じゃあ場所変えないかしら。長くかかりそうだしね」

アテネは不適な笑みを浮かべながら言った。

1話　魔法少女アテネ（後書き）

＊5月21日に修正しました。
＊6月14日に誤字脱字を修正しました。

2話　神内の家（前書き）

忙しいのでだいたい1週間程度で更新しています。

2話　神内の家

神内真理（じんないしんり）は、竜崎アテネから詳しい話を聞くべく、自分の家に場所を移すことになった。

「なんで俺の家なんだよ。」

「その方がゆっくり話せるでしょ。」

真理は自分の家に着くとアテネに言った。

「じゃあ少しここで待っててくれ。」

そして真理はまだ暗い家の中に入っていった。

真理が家の中に入ると、まず家のどこからも人の気配がしないのに気がついた。

（あれ、まだ母さんは帰ってきてないのか？）

真理の母親は、息子に言わせると“なんだかよくわからない”仕事をしている。しかし、いつも晩御飯を食べる頃には帰っていたのである。真理の記憶には母親が夜遅くまで帰ってこないということはなかった。

（なんかあったのかな。まぁ、直に帰って来るだろ。）

そんなことを思いながら真理はリビングルームにあるテーブルの上に置かれた紙に気がついた。

その紙には母親の字で、

“母さんはしばらく家に帰らないから一人で頑張ってね～“

とだけ書いてあった。

・・・・・・

「ほい、これが俺の家。」

真理はとりあえずアテネを招き入れた。
「なかなかきれいにしてあるのね。」
「あぁ、ありがとう。母さんは掃除が嫌いだから、俺が掃除をするんだよ。」
アテネは物珍しそうに棚の上に置かれたたくさんの奇抜な形の置物を見ていた。
「これは？」
「これは母さんの趣味。いろんなところ行って買ってくるんだ。」
「へぇ。」

「で、何かあったの？」
「あぁこんなものがあった。」
真理はアテネに先程の紙を見せた。
「なるほどね。これはいつものことなの？」
「いや、初めてだ。」
「ふーん。」

「少し電話してくるからそこにでも座って待っててくれ。」
「わかった。」
真理は携帯電話に入っている母親の電話番号を呼び出した。

「・・・・・・」
ガチャ
「おかけになった電話番号は、電波が届かないか電源が入っていません。ピーとなり…」
「はぁー」
（たまに電話かけると繋がんないけど、なんで繋がんないんだよ。）
うなだれて向かい側に座ろうとした真理に、アテネは紙を見せな

がら言った。
「ねぇ、これはなんなの?電話番号っぽいけど。」
先程の紙の裏側の隅を指差していた。
「うん?なんだろうな。かけてみるか。」
真理はその電話番号をプッシュした。

「・・・・・・」
ガチャ
「もしもし~真理?」
母親に繋がったようだ。
「あぁ俺だ。テーブルに置いてあった紙はなんなんだ?」
「それは~書いてある通り~一ヶ月ぐらい家に帰らないよ~って話~」
「いきなり何があったんだよ?」
「それは~仕事の関係で~」
「仕事なのか。」
「あ~ちょっと立て込んでるから~切るね~」
ブチッ
ツーツー

「なんなんだよ……まったく一ヶ月も帰ってこないなんて。」

~少し時間をおいて~

部屋で落ちついてから真理は自分が気になった話を聞いた。
「いくつか聞きたいことがある。」
「まず何かしら。」
「鬼ってなんだ?」

アテネは一息いれてから言った。
「鬼っていうのは、簡単にいうと異怪のものね。姿形はさまざまで、人に似ているのもいるわ。普通では見分けがつかないこともある。」
「魔法少女にはわかるのか？」
「そのための魔法道具（アイテム）がある。」

アテネは手の平にいつのまにか出した魔法道具（アイテム）を見せた。
それは、卵のような形のペンダントだった。真ん中に埋め込まれた宝石が紫色にほのかな光を放っている。
「これがその魔法道具（アイテム）か。」
「そう、宝玉（ジェム）というの。」
「で、その宝玉（ジェム）の使い方は？」
「鬼が近くにいるとより輝く性質があるから、その輝きの度合いで鬼を見分けるだけ。」
「ますます似ているよな。」
「気にしたら負けよ。」

「まだ聞きたいことはあるんでしょ。」
「あぁ谷についてなんだが、アレってなんか種類でもあるのか？」
アテネは大きく頷いた。
「そう、ご名答よ。アンタが落ちたのはＡランクの谷よ。」
「それってどんくらいなんだよ。」
「ランクはＳ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅってなっているからかなり危険な谷だったのよ。名前は“無個の谷“。性質は存在の希薄・消滅よ。」
「ふーん結構危なかったんだな、俺。」
「危なかったどころじゃないわ。普通の人だと1時間で魂が無く

なるわ。」
「後でわかったけど、俺４時間くらいいたぞ。だけど自分が何者かわかんなくなるぐらいだったぞ。谷の力が弱かったんじゃないのか？」
「それがわかんないのよ。なんでアンタがピンピンしているのかが。」
「やっぱりわかんないか。」

「・・・一つの仮定を除いて、説明できないわ。」
その一言と共にアテネの周りの空気が重くなった。真理は何か嫌な予感がした。今まで信じていた何かが壊れる予感が。

「アンタが魔法を打ち消す能力（ちから）があるって仮定よ。もはや真実だと思うけどね。」

アテネの一言によって真理の中に抑えられていた何かがはじけとんだ。今まで封じられていた記憶の断片が蘇ってきた。

「まぁ不思議な能力（ちから）よね、見たことな『うあああああ！』いわって何よ、いきなり。」
真理は叫んでいた。自分の身体の中で暴れる記憶（かいぶつ）を抑えようとするので精一杯だった。口から洩れる叫び声を気にすることはできなかった。
「ちょっとアンタ大丈夫なの！？」

アテネは立ち上がって叫び声をあげている真理を宥めようと駆け

寄った。

そして真理は気絶した。

2話　神内の家（後書き）

＊5月21日に修正しました。
＊10月25日に一部表現を修正しました。

3話　過去と未来と、ただその分かれ道にて（前書き）

更新が遅れるかもしれませんがご了承ください。

3話　過去と未来と、ただその分かれ道にて

～神内真理（じんないしんり）の精神世界～

まだ俺が小さいころだ。当時は、今住んでいるような賑やかな（まぁ賑やかだといえる）場所ではなく、東北の田舎の村に住んでいた。閉ざされた社会だった。外から来る者はなく、外の文化もあまり入ってこない村。そこの村人は生まれて年老いて死ぬまでその村で生活する、その繰り返し。

周りには豊富な自然があるため食糧には困らないし、不作であったことはなく常に作物が実っていた。

村人はこれを土地神“古狸（こり）”様のご加護だと言った。だからその村は古狸（こり）様を信仰していた。

・・・そこからなんで俺らの家族がその村を出て今の家に落ち着いたかは覚えていない。

今、俺が思い出せる当時の記憶は、その村の風景と、ある光景だけだった。

『お前はなっ何者なんだ。』

『まさかこんなやつが存在するとは・・・』

『尋常ならざる者めが・・・』

暗闇の中でそんなふうなことを言われる記憶。子供心に思ったのは、“普通”であろうと。人と違うのが嫌で常に人と同じくしようとしていた。

それがいつの日か、“目的”が消え、ただ“行動”だけが残った。俺は無意識の内に人のことを見て行動するようになった。趣味の人間観察もそこから始まっていたのだ。

常に普通の人であろうとしていた。

～真理の家～

「いい加減目を覚ませぇ！」

アテネはなかなか目覚めぬ真理の腹にキレのいいアッパーをかました。

「うげっ」

その一撃で真理はやっと目を覚ました。

「まったく、いきなり叫んでいきなりぶっ倒れるなんて何なのよ！」

「・・・俺はそんなことしていたのか。」

「そうよ、何があったってわけよ。まさか私のせいで卒倒したってわけじゃないよね。」

「いや、昔のことを思い出しただけだ。」

するとアテネはそれまでゆがんでいた表情からもどって、落ち着いた表情になった。

「ならいいんだけど。私のせいでなんかあったら、ただじゃすまさないんだから。」

俯きながら真理を見て話すアテネは、本人は意識していないのだが、ちょうど上目遣いで話しているのだった。真理は上目遣いで話すアテネのことをかわいいなーと思っていた。

「すまなかった。」

「うむ。」

アテネは普通だとか普通じゃないとかそういった話がタブーなん

だなと感じた。
そこのところは、いずれおいおい調べていこうと思った。

～そして晩御飯～
「なんで食べる側なんだ。」
真理は思わず呟いた。
それもそのはず、アテネはイスにちょこんと座っていたのだ。

「だって他人(ひと)の家の台所って使い勝手が違うんだから。」
「いや、だからといって手伝わないって理屈にはならないぞ。
食器とか運べ。」
「はいはい。」

なんだかんだあって気づいたら22時になっていて、二人とも晩御飯を食べていなかったので一緒に食べることになった。
真理はいつも料理を作らない母親の代わりに一応料理は作れるのだった。
その日の晩御飯はチャーハンとほうれん草の煮浸しだった。

二人はそれらをあっという間に平らげた。男子学生である真理はともかく、アテネも相当お腹を減らしていたのだった。かなりの量あったチャーハンをぺろりと平らげていた。

食事が一段落して真理は言った。
「まだまだ聞きたいことがあるんだよ。さっきもなんだかんだで途中になってしまったし。」
「別にいいけど、一つ話したいことがあるから先に言わして。」

アテネはひとこと真理に言い放った。

「これからしばらくこの家に住むから。よろしく。」

・・・・・・

「はぃ!?」
「だからしばらくここに住まわさせてもらうって話。」
「なんでだよ。お前にも家があるんじゃないのか?」
「家はないわ。いつも野宿かホテルよ。」
「そうだったのか。…ってよりによって俺の家なんだよ!」

するとアテネはしおらしく言った。
「一緒じゃいやなの?」

バーン
真理に効果抜群のようだ。

「そうじゃないんだけど、怖くないのか?」
「だって襲ってきたって私の方が強いし。まだアンタのこと知らないことが多いけど、しっしっ信頼したいし。」
「・・・わかったよ。」
アテネはほっと一息をついた。

「ちょうどアンタ、親いないでしょ。ちょうどいいじゃない。」
「ほんとそうだよな。」
真理は向かい側に座るアテネをじっと眺めた。

～閑話休題～
「よし、答えるぞ。なんでも来い。」
アテネは言った。

しばらく真理の質問は続いた。簡単にまとめると・・・
能力者とはその名の通り異能の力を持つ人で、例えば手の平から炎を出す“発火能力者（パイロキネシスト）”や、物体を瞬時に別の場所に転送する“転送能力者（テレポーター）”などいろいろな種類がある。
あまりに種類が多いため実際どんな能力（チカラ）があるかあまりわかっていない。

魔法少女の使命は鬼を排除することで、また谷に落ちたりや呪いにかかったりした人を助けることだ。基本的にそのためにしか魔法は使ってはいけない。そう決まっている。

魔法少女の数は数万人で、命を落とす者や新たになる者がいるため数は変動するそうだ。
また、魔法少女になるためにはある程度の素質・環境が必要で、それらを満たした少女の前に魔法獣が現れる。彼らは様々な姿をしていて、基本的にその少女にしか見えない。少女は魔法獣と契約を交わすことによって、一つの願いを叶える代わりに魔法少女となる

使命が与えられる。ちなみにその契約をしてしまったら破棄することはできない。

などなど・・・

「で、竜崎はどんな願いを叶えたんだ？」

「知りたいのか？」

「あぁ。」

「聞いて後悔するかもしれないぞ。」

「後悔したとしてもそれでも構わないぞ。何てったって気になるんだからな。」

アテネは迷うそぶりを見せ、少し間を置いて思い切って言い放った。

「復讐するための力が欲しいっていう願いだ。」

3話　過去と未来と、ただその分かれ道にて（後書き）

ついに舞台が整いました。
次あたりから物語は動き始め…るつもりです。

4話　アテネの過去（前書き）

しばらく忙しかった（現在進行形）ため更新が遅れました。すいません。
今後もしばらく遅れるかと思いますので気長に待っててください。

4話　アテネの過去

「復讐・・・・・・？」
聞き覚えのない言葉に真理は首を傾げた。

「復習じゃなくて復讐なのか？」
「そうだ、復讐よ。」

竜崎アテネの過去に何があったのだろうか。真理は気になって聞こうとするが、アテネから声をかけてはいけない雰囲気がした。
「まぁ、アンタになら話してもいいかな。
もう一度言うけど、話の続きを聞くことに後悔はない？」
「あぁ。ぜひ聞きたい。」
「じゃあどこから話そうかな。」

～アテネの話～

私はいわゆる普通の家庭で育った。お父さんがサラリーマンで、会社ではそれなりの地位を築いていたらしかったわね。
その頃の私は知らなかったから聞いた話だけどね。誰に対しても優しい人だった。
お母さんは専業主婦でこれまた夫と釣り合うほど優しい人だった。
当然私に対して優しくしてくれて、私は幸せだった。私は両親に恵まれて育った。

私が小学４年の時に、お父さんは持ち前の優しさのせいで、友人

の借金の連帯保証人になった。

そして、そのお父さんの友人は夜逃げした。そのせいでお父さんは多額の借金を抱え込み、私の家は幸せな生活から一夜にして追われる生活に変わった。

それからというのは大変だった。借金は借りては返しどんどん膨らんでいった。それと同時に生活が貧しくなっていった。

以前の夕食がご飯と焼き魚と生野菜と味噌汁であったのに、そのうちパン一個とかに変わった。

まだ子供であった私は何が起きているのか理解できていなかった。

そして、ある日学校から帰ってくると、家の中で血まみれの、少し前まで私の両親だった二つの肉塊があった。

その日私はクラブ活動でたまたまいつもより遅くに家に着いた。そして疲れて家に帰れば、いつもなら顔に陰りを見せながらも優しく振る舞ってくれた両親はいなかった。

二つの肉塊を前にして、私は何が起きているのか理解できなかった。

理解するには私は幼すぎた。

…その後どうしたかはあまり覚えていない。

覚えているのは、警官が家の中を歩き回っていたこと、近所の人達が興味津々に覗きこんでいたこと、そのぐらいだ。

後で聞いた話によれば、両親は借金を重ね、暴力団がバックについている消費者金融にまで借金していた。
私は気づかなかったが、執拗な催促の電話があったそうだ。
もともと優しい性格をしている両親は相当まいっていたようだ。
そしてあの日、辛さに耐えかねて、両親は無理心中を決行した。

事件の後、親戚の家に引き取られ、私が小学校から中学校に上がる時に、事件の真相を知った。
父方の叔母さんの口から、知っておいた方がいいということで教えられた。
叔母さんはホントは辛くなるから話さない方がいいかもしれないけどねと言っていた。

知った時に思ったのは、いかに私が無力かってことね。
両親が辛い思いをしている中で何もできずにいた私。
無力でなければ私のお父さんお母さんは死なずに済んだかもしれない。
そう思った。
多分その瞬間からかな、力が私にあればって思い始めたのは。

事件の真相を知った私は、誰が私の両親を死にやったのかを、調べた。
それらは案外簡単に調べることができた。

その当時、両親が無理心中した事件は大きな事件として扱われていた。
そのおかげで新聞や週刊誌に大々的に取り上げられていた。

私の両親を殺したのは、激しく取り立てた男達二人、お父さんに借金を押し付けたお父さんの友人とその家族だった。

私の両親を殺した相手がわかったからといって復讐することなんて出来る訳がない。
だから私には罰を与えるだけの力が必要だった。
しかし、その時の私には手に入れる機会（チャンス）なんてなかった。
そもそもそういった力は尋常な手段で手に入るものじゃないしね。

そして心の中に憎悪を潜め、私は中学生として忙しい日々を過ごした。
結局、私は親戚の家に養子として引き取られ、前に住んでいたところから離れた。
周りには事情を知る人はいなかったため過ごしやすい環境だった。

そして、中学生として初めての夏休みが差し迫っていたある日、私にとって最大の転機が訪れた。

セロリとの出会いだった。

・・・・・・

「セロリってなんなんだよ・・・」

真理は話の腰を折った。

「セロリは私の魔法獣の名前。私に魂と引き換えに、願いを叶えて魔法を使う力と知識をくれた張本人。」

「・・・魂と引き換えに？」

「願いを叶えることっていうのは尋常じゃない力の行使ということになる。

それだけの対価が必要になる。つまり魂を対価にするのよ。」

「魂を対価にするってことは魂がなくなってしまうんじゃないのか？」

「魂を対価にするといっても魂を抜き取るという訳ではない。

魂を変質させて、簡単にいうと人間のそれじゃないものにして、異怪のものと闘うことを義務付けられる。

まぁ、義務付けられるというよりその必要に迫られる。」

「そうだったのか。

そのセロリっていう魔法獣が魔法少女の使命と引き換えに願いを叶えたのか。」

「そう、私はそのおかげで復讐をできた。」

アテネの目は部屋の空（くう）を捕らえていた。

自らの手で怨敵を討ち取った時のことを思い出しながら。

そして、ぽつりと言った。

「私は復讐をしたけど、それで心は晴れなかったな・・・」

次の日

真理は一介の高校生であり、今日はまだ六月の平日である。

つまり学校に行く必要が当然ある。

「じゃあ行ってくる。」

真理は玄関で同居人に声をかけた。

「そうだ、竜崎は学校行かないのか？魔法少女ってどうなんだか知らないけど。」

「心配しなくてもいい。後でわかる。」

「なんで後でなんだよ。

まぁ、ほれ。家の鍵だ。持っておけ。何個かあるから持っていていいぞ。」

「うむ、わかった。」

「じゃあ行ってくる。」

真理は家を出て、歩いて十分もかからない学校へ向かった。

真理が家を出てすぐに、まだ持参している寝巻の姿のアテネは言った。

「さて、私も遅刻しないようにしないと。」

４話　アテネの過去（後書き）

気長に待っててください。

＊６月１４日に誤字脱字を修正しました。

5話　真理の学校（前書き）

なんとか5話まで来ました。まだまだ話は展開していないですがお付き合いください。

5話　真理の学校

真理が通っている学校は丘の上に建っていた。この学校の周りは樹木に覆われ、校舎の白色が映えていた。

そう、真理はこの桐陵高校の一年生だ。

■

真理はいつも余裕を持って学校に着いているため、教室に入ると2～3人しかいない。

今日は2人だった。

そのうちの一人は真理が心の置ける友人の一人だった。

「よっ！」

その友人：安部大輔（やすべだいすけ）は教室に入ってくる真理に気付くと、手元の本から目を離し声を掛けた。

「おぅ！今日はどんなの見てるんだ？」

「今日はこれだ。大したことないぞ。

あまり良くなかったな。タッチが好みじゃないな。」

大輔は真理に手に持っていた雑誌を渡した。

その雑誌は漫画雑誌のようなもので、開いていたページにはまだ小学生ぐらいの少女が【自主規制】していた。

簡単にいうとその雑誌はＲ－１８指定されているのであった。

「大体もっと艶やかでいいのに。その方が映える。」

「さいですか・・・」

「そうそう今日のはお前にピッタリのものを持ってきた。」
「どれどれ・・・」
「いや、さすがに今出すと委員長に見つかると没収されると困るから後でな。」
「わかったよ。」
真理は残念そうに言った。

「さて、お前が来たってことはそろそろ委員長が来る頃かな。最近来るの早いんだよなーおばさんは帰れって。」
「はははは・・・」
「まったく幼女に『おにいちゃん、変態！』って言われるなら止めるけど・・・
いや言われたいがためにやるけどな。」
「大輔らしいな。」
「それならいいが、なんであの年増の委員長にしかられなければならないんだ。」

「だれが年増かな～大輔ぇー？」
話をしてて気付かなかったが後ろに真理が心の置ける友人のもう一人が立っていた。

「げっ、聞かれていたか。」
「ばっちり聞こえてましたがー」
「別にお前のことじゃないからな、後ろ手に隠した竹刀でなぐるなよ。」
「あれ～このクラスで委員長って言ったら私しかいないよねぇ。どういうことかしら。」
「だから違う話だって」
「問答無用！」

バキッ

「っ、あぶねぇ」

「訂正したら許すけどなー」

「はいはい、委員長さんはお若く美しいお嬢さんです。」

「それでよろしい。」

大輔と委員長さん：柴早苗（しばさなえ）の恒例の口論がようやく終わった。

「まったくお似合いだな、大輔と委員長さんは。」

真理は一言呟いた。

「何を言うんだい真理。滅多なことは言うなよ。」

「そうだよ、なんでこんなロリコンなんかと。」

「俺はロリコンではない、紳士だ。」

「じゃあ変態紳士ね。」

「余計にひどくなっている！」

「仕方ないでしょ、大輔のことなんだから。」

「どうにかしてくれよ、真理。」

「なんで俺に振るんだよ・・・」

「真理はロリコンじゃないよね？」

「そこから！？」

真理をも巻き込んだ言い合いは一時間目が始まるまで続いた。

真理と大輔と早苗は小学校からの幼なじみで、互いに気の許せる仲である。大輔と早苗とは家は隣同士という訳ではなく、互いに少し離れた位置にある。小さい頃はしょっちゅう互いの家に遊びに行っていた。さすがに年齢が上がるに従って回数は減ってきてはいるが。

■

「とぉこぉろがどっこい、著者はこの意見に対して・・・」

大きな声を出して重要箇所を強調する福井先生。一時間目の現代国語の授業だ。この先生は大きな声を出すのと同時に大きく踏み込みをするのだ。その踏み込みは剣道をやっている人顔負けである。しかし、福山先生は剣道部の顧問ではない。山岳部の顧問というのに対し疑問を感じる人も少なくない。

閑話休題、そんな授業中に真理は考え事にふけていた。いや、半分夢の中だった。考え事している夢だった。もちろん考え事というのはアテネの事についてだった。昨日はいろいろなことがあった。結局話をあれこれ聞いているうちにいつのまにかに夜が更けていたのだ。

（そういえば竜崎は学校に関して後でわかるって言っていたけど、どうするつもりだろうな。そもそも学校に行っているのかな。だいたい竜崎は何歳なんだろうか・・・）

「おーい、起きろぉ。珍しいな、神内が寝るなんてな。」

「あっ、はい。すいません。」

居眠りとも考え事とも言えるが、どちらにせよ授業に集中していなかったには変わりなかったため、真理は素直に謝った。

最前列で、且つ真面目なことで信頼を勝ち取っている真理が授業に集中していないというのは目立つのだった。

■

そんな真理の様子を後ろの席からじっと見ている少女がいた。

なんだかんだで午前中の授業が終わった。さて、お昼だーというところで、真理は教頭：白鳥先生に呼び止められた。

「神内真理君っているかしら？」

「俺がそうですが。」

「あっ、君が神内君ね、ふむふむ。今日はとりあえず何もないけど、今後呼び出すかもしれないかもしれないからよろしく。」

「はい、わかりました。」

白鳥先生は自分が言いたいことだけ言うと颯爽と立ち去っていった。

（白鳥先生は何をしたかったのだろうか？）

真理は疑問に思った。しかし、すぐに目の前の昼食のことを考えている内に、先程の疑問は頭から抜け落ちていた。

「おっ、今日の日替わり定食は生姜焼きか。」

真理と大輔はいっしょに食堂で昼食を食べていた。「おいしそうだな。」

「だろ？真理は・・・いつも通り焼き魚か。好きだな、それ。」

「安定の焼き魚だ。」

この学校の学食はレベルが高い。食べ物のバリエーションが多いのだ。生姜焼きや焼き魚だけでなく、基本な料理が揃っている。中には普段見られないような料理もある。

「そういえばさっき白鳥先生に呼ばれたけど、なんだったんだ？なんか確認していたようだったんだが。」

「よくわからなかった。」

「なんか白鳥先生ってあんまり話したことないだけでないが、何を考えているのかわからないな。」

「同感だ。白鳥先生だけでなく他の先生にも多いと思うな。」
「あまり生徒に干渉してこないのがいいところだ。そうそう、ほいコレ。」
大輔は鞄の中から中に箱が入っているビニール袋を取り出し、真理に手渡した。
「おおっ！コレは・・・」
「そう、お前にピッタリのやつだ。まだ初心者にはライトな方がやりやすい。」
「ありがとな。」
「どうもどうも。」
ビニール袋に入っていたブツは、Ｒ－１８指定のＰＣゲームのＣＤ－ＲＯＭで、いわゆるエロゲーだった。
「だけど、家に同居人がいるからやりづらいんだよな。」
「同居人がいるのか。それは大変だな。」

■

そして、一日の授業が終わった。
真理は教室で部活に行くクラスメイトを前に帰り支度をしていた。
大輔は山岳部、早苗は剣道部だ。
真理も一応テニス部に入っていることになるが、入部して二週間で行っていない。
まだ一年生の６月ということもあり、ほぼ全員が部活に入っている。
そのため真理は一人帰途に着くのだった。

家に入ると、アテネはいなかった。

5話　真理の学校（後書き）

最近忙しいもので不定期投稿になっていますが容赦ください。
次回こそはバトルシーンを入れたいと思っています。

6話　犬鬼（けんき）（前書き）

ついに戦闘シーンを書くことができました～　わーい

6話　犬鬼（けんき）

真理がリビングに入るとテーブルの上にメモ用紙が置いてあった。
そのメモには

「少し買い物に行っている。　アテネ」

と書いてあった。
まさか、この家を出ていくと書いてあるのではないかと思った。
アテネもこの家に住むことになったのだからいろいろと物入りなのだろうと勝手に予想していた。

真理が家に帰ってきてから少しして、アテネが帰ってきた。
両手にデパートの紙袋を抱えて。

「何買ってきたんだい？」
「いろいろと準備よ。」
「服とかか？」
「まぁそうね。服よ、これから使う服なのよ。」
「はいはい、そういえばお金は大丈夫なのか？」

するとアテネは鞄から自分の財布を取り出し、中身を見せた。
「とりあえず今はこんくらい。」
「えっと諭吉さんが一枚二枚三枚・・・・・・十枚も入っているのか！？」
「結構私は有名な魔法少女だから実りの良い依頼が来るんだ。だから、お金に関しては問題ない。」
「そうか、なら安心だな。これでお金がないとか言ったら困ってたがな。」

「借りたくなったら言いなさい。十一（といち）で貸してあげるから。」
「・・・やめておこう。」

■

二人が夕食を食べた後、真理は冷蔵庫の中を見ていて、牛乳がきれていることに気が付いた。
「ちょっとコンビニに行ってくる。」
「私もついていこうか？
最近物騒だって言ってるし、また谷に嵌まってしまうかもしれないし。」

「いや、いつもの道を歩くから大丈夫だ。ちょっと行ってくるだけだし。」
「そう、そこまで言うならわかったわよ。」
「心配してくれてるのか？」
「いや、別にそういうつもりじゃなくて・・・アンタ変態だから大丈夫だよね！」
「いきなりなんだよ・・・」
真理は家を出た。

■

夜の道は暗くひんやりとしていた。
人の姿は見当たらなかった。
真理は公園の中を突き抜けて、コンビニへと足を動かした。

コンビニで牛乳を買って家に帰る途中、真理は公園の中で一匹の犬が自分を追いかけてきているのに気付いた。

普通夜に歩いている犬はいない。いたとしても飼い犬ぐらいだ。

まして、野良犬というのは珍しい。
なぜ犬がこんな夜に歩いているのだろうか？

すると突然その犬が襲い掛かってきた。
「がるるっ！」
「うわっ！」

真理はいきなり襲い掛かってきた犬に驚いて、前に転がった。
地面が濡れていて服が汚れたがそんなことを気にしている余裕なんてなかった。
「なんなんだよ、この犬！　こっち来るな、こん畜生。」

すると真理の言った言葉に反応して、犬が口を開けた。
そして、言葉を発した。
「わいは畜生じゃないで。
わいの名は小次郎や、そこんところ間違えんといて。」

その犬はえせ関西弁で話してきた。

「・・・小次郎さん、なぜ俺を襲うんだ。」
「決まっているじゃないか、今夜の飯にするだけやで。」
再び犬（？）の小次郎が噛み付いてきた。
まだ地面に膝をついている真理は避けようがなかった。
そして真理は無意識の内に手を伸ばし、小次郎の突き出た鼻を張り飛ばした。

なんとか一回の噛み付きを防御することができたが、態勢を立て直した小次郎の次の攻撃をかわすのは不可能だった。
そして真理は腕に噛み付かれた。

今まで犬に手を噛まれるという経験をしたことのなかった真理にとって、その痛みは想像を超える痛みだった。
その上、小次郎の牙には”かえし”が付いていて容易に抜けないようになっていた。
真理の苦痛は長引いた。
小次郎も力を緩めないからまったく抜けないのだった。
傷口からは血が溢れ出ていた。

そのうちに真理は目の前が霞んできていることに気付いた。
噛まれた傷の痛みも感じなくなってきた。
（あぁ・・・俺死ぬのかな。）
「やれ、もう死ぬのかいな。
初めてのお勤めお疲れ様やで。」
そして真理の目の前はまっしろになった。

真理の脳裏に未知の声が響いた。

『身体に異常あり　ただちに修復（リカバリー）を展開。
ならびに防御陣（フィールド）の展開。』

その瞬間真理の意識が覚醒した。
目の前にはまだ自分の腕をくわえたままの小次郎が見えた。
意識を失った時間はわずかだった。
真理は小次郎が驚愕の表情をしていることに気付いた。
視線の先は自分自身の腕だった。

牙が刺さっているはずの腕は、血のあとがなく傷一つなかった。
それどころか刺さっているはずの牙は全て折れてなくなっていた。

小次郎が驚いている間に真理は自分の体の半分くらいの犬の体を突き飛ばすことで、なんとか距離を取ることができた。

「アンタ何なんや・・・先輩は狩りは簡単やってゆーてたけど、難しんやな。
牙が折られたらアンタを食べるのが大変や。」
その言葉とともに小次郎の牙が生え変わった。
以前のより大きく鋭い、かえしの付いた牙がそこにあった。

「何やってあっしの牙を折ったのか知りまへんが、あっしの牙は何度でも生えてきますで～」

（なんなんだよ、この犬。しゃべったり牙がすぐに生え変わったり。まるで化け物だな。）

真理は小次郎の動きに合わせて後ずさった。
隙があれば逃げるためだ。
小次郎に隙が出来る瞬間は二つ。
一つは攻撃する時。
もう一つは、予想外のことが起きた時。
先程の真理の腕の時もそうだ。
この状況で考えられることは、何者かが乱入してくること・・・

小次郎が真理に噛み付こうとして地面を蹴った瞬間、猛スピードで空を跳んでいたアテネが蹴り飛ばした。
蹴り飛ばした犬の体は手鞠のように公園の奥にすっ飛んでいった。
アテネは真理のそばに駆け寄った。

「真理、大丈夫!?」
「あぁ、なんとか。
あの犬、言葉を話したり牙が生え変わったりしたんだ。」
「そう、じゃあ犬鬼(けんき)ね。」
「・・・犬鬼(けんき)?」
「鬼の一種よ。まぁその中でも弱い種族だけどね。」

公園の奥から吹っ飛ばされた小次郎がゆらゆらと歩いてきた。
「アンタ誰や?」
「私は竜崎アテネ、魔法少女よ。私の仕事は鬼を狩ることよ。覚悟しなさい。」

アテネは右手にはめた指輪を掲げ、鎌を出現させた。その鎌を構えた。

すると小次郎はがたがた震え始めた。

「魔法少女や・・・あかんわ。」

そして小次郎は一目散に逃げ出した。

「あぁ面倒くさい。『加速(アクセル)』！」

アテネは魔法を起動させると一瞬の内に追いつき、そして鎌を振り下ろした。

一瞬金切り声が聞こえたかと思うとすぐに元の静寂が戻ってきた。公園の奥には胴体を縦に真っ二つに斬られ息絶えた肉塊があるだけだった。

アテネが追い抜き際に切り裂いたのだ。

その塊は少しして光の粒子を放ち消えていった。

「竜崎、今のは・・・？」

真理の今の光に関する疑問にアテネは即答した。

「鬼っていうのは魂を実態化させて肉体を保っているの。

だから魂が消えると肉体も姿を保てない。

そして光に包まれて消える。意外とロマンチックでしょ。」

「ロマンチックか・・・？」

「そういえばどうして俺が襲われているのがわかったのかい？」
「・・・勘よ。なんとなくそう感じただけ。他意はないわ。」
「そうか。まぁ助かったよ。竜崎強いよな。」
「まあね。私は”鬼狩りのアテネ”って言われて恐れられてるんだから。」
「そうなのか、凄いな。」
「もっと私を尊敬しなさい。」
「お見それしました。」

「そろそろ帰りましょ。他の面倒なことに巻き込まれる前に。」
「そうだね。」

真理は公園の芝生の上に落として置いた買ったものを拾い、一つ提案してみた。

「もう一度コンビニ行く？」

6話　犬鬼（けんき）（後書き）

忙しいため投稿が遅いです。気長に待っててください。

間話　ある魔法少女の朝（前書き）

6．5話のようなものです。

間話　ある魔法少女の朝

私の朝はまず髪をまとめることから始まる。
それからコップに水を入れて二杯飲む。
そしてランニングウェアに着替えてパトロールを兼ねてランニングに出かける。

この街には鬼や谷が多い。様々な伝説が伝え残されていることから分かると通り、太古の昔からそういう者たちと関わってきている。
だけど私はこの街で生まれ、この街で生きているから他の街を知らない。あくまで人から聞いた話だ。
しかし、近頃の鬼はタチが悪い。見境もなく人を襲う。たとえ近くに彼らの仇と為す魔法少女がいても。
しかも力を付けてきているため簡単に追い払えるとは言えない。
一歩間違うとこちらの命まで取られる。
用心しないといけない。

それにしても今日も妖気が濃い。
多分今日辺りに一匹鬼を見付けるだろう。
見付けたら私の魔法で燃やしてやろう。
特に近頃の鬼は人に害する存在でしかない。早めに対処しないと被害が出てしまう。
だからこそ燃やして清めてしまおう。私のような人を作らないため。

私の魔法『火炎処女（フレイムメイデン）』で。
跡形も残さずに、消し去るために。

そして私の一日は始まるのだった。

7話　桐陵高校のアテネ（1）（前書き）

まだまだ話の展開が進んでいないですが気長に待っててください。
早く鬼を出したい・・・

7話　桐陵高校のアテネ（1）

犬鬼（けんき）に襲われた次の日の朝、真理は一人で、うつらうつらと朝食を食べていた。
まぁ無理もない。
なぜならここ二日間、不思議（イレギュラー）なことが立て続けに起こったのだから、寝不足なのである。

「味噌汁はどこ？」
アテネが起きてきた。

「味噌汁は戸棚の中に元がある。
朝早いな、まだ寝ていても大丈夫じゃないかな。」
「そうもいかないのよ、今日は早めに出かけないと間に合わない。」

アテネは手早くお椀に味噌汁の元を入れお湯を注ぎ味噌汁を作ると、一気に飲み干した。
そして洗面所に行った。

「…あぁ眠い。」

真理はいつも通りの時間に家を出た。
もうすでにアテネは家を出ていたので、鍵をかけているのだった。

（それにしても俺は何なんだろうな。）
真理は昨晩のことを思い出しながらふと思った。

アテネには昨晩自分が見たままを伝えた。
さすがに素人の自分には手に終えなかったからだ。専門家であるアテネになら何かわかるのではないかと。
真理は今この時点ですでに自分が普通の人ではないと感じていた。
アテネに会ってからの自分がしたこと、記憶の封印が少し解け戻ってきた昔の記憶を総合的に考えると、自分には何か異能の力を持っているのではないかと思った。

しかしアテネにもそのような力を知らなかった。
仮に真理が”能力者”であるとすると、能力者は一つの力しか使えないため、さらに能力者の力は目に見える現象しか起こせないため、ありえないそうだ。
アテネは「超能力者協会（Ｓｕｐｅｒｎａｔｕｒａｌ　Ａｂｉｌｉｔｙ　Ｓｏｃｉｅｔｙ）：通称（サス）ＳＡＳ」という”能力者”を統率している団体にまで問い合わせして調べたらしい。
少なくとも真理は能力者ではない。魔法を無効化し傷を癒し、あまつさえ物理障壁を展開した。それぞれ統一性のない力のラインナップだ。
アテネ曰く、真理には魔法や超能力では説明できない別次元の力が宿っていると。

真理には自分に宿っている力をまだ理解できていない。
（まぁ、別に問題があるわけじゃないし、後でいいか。
いつか俺の力についてわかるだろうし。）

しかし、真理の存在に魔法少女が接近したことで事態が動き始めていることに、真理は知る由もなかった。

■

真理はいつも通り学校に着いて安部と話して朝のＨＲ（ホームルーム）が始まるまでの時間を過ごしていた。

そしてＨＲの時間。始業のチャイムが鳴ると同時に担任の先生が来た。真理の担任は、河野香織（こうのかおり）という妖艶な雰囲気を持つ女性だ。

円熟した体つきをしているのに肌がみずみずしいという年齢不詳の、今年この学校に来た先生だ。

「今日はこのクラスに転校生が来ました。では、竜崎さんどうぞ。」

（・・・？今、竜崎さんって言ったよな。まさか・・・）

河野先生の呼び声で、教室のドアが開き、一人の少女が入って来た。

「じゃあ竜崎さん自己紹介お願いするね。」

「はい、先生。

私の名前は竜崎アテネです。この時期に急遽家の都合で転校することになりました。よろしくお願いします。」

黒板に名前を書いてそう言った。

ちょうど最前列に座っている真理の目の前に、ブレザーを着たアテネが立っていた。

真理はアテネが目の前にいるということが理解できなかった。

なぜこの学校に入って来たのか、と。

クラスメイトは綺麗な顔立ちをしていてどこかのお嬢様のように立っているアテネに釘付けだった。

「じゃああんまり時間ないけど竜崎さんに何か質問とかあるかしら。」
河野先生は質問を促した。

「はい！竜崎さんは前はどこにいたんですか！？」
「前は京都の方にいました。」

「趣味はなんですか？」
「基本的にいろいろしますが、特に読書です。」

「好きな食べ物はなんですか？」
「果物とケーキが好きです。」

（・・・なんか全然キャラが違う。）
真理はアテネの様子を見てそう思った。

そんな真理にアテネはウィンクをした。

■

そしてチャイムが鳴り質問も一区切りになった。
河野先生が教室を出て行き、野獣（クラスメイト）どもが教室の左隅に座ったアテネの周りに集まった。
質問の続きをするためだ。
「竜崎さんってどこに住んでいるの？」

その質問に対してアテネは至極当たり前のように言った。
「訳あって、神内君の家に居候させてもらっているの。」

爆弾が投下された。
その発言によって騒がしかった教室が一瞬の内に静かになった。
凍り付いたかのようだった。

（おいいいい！何言っているんだ竜崎。）

教室の野獣（クラスメイト）どもは神内をジッと見つめた。
その視線は一つの意味を持っていた。説明をしろと。

「いやいや、竜崎は俺の母親の方で関係があって、別に竜崎とはただの居候という関係だけで・・・」
真理は言い訳がましく説明をするが、周りの目は非難の色が浮かんでいた。

「おい、神内。居候が竜崎さんなのか！羨ましい奴め、俺と代われ！」
と左隣の小林レオが言った。

「いい年頃の男女が一緒の家に住むなんて・・・ふっふしだらだ！」
と後ろの席の風紀委員である三条詩織（さんじょうしおり）は言った。

右隣の大輔とその後ろの早苗は生温かい目で真理を見ていた。
「いや、だから家の都合でそうなったんだからさ。」

1時間目が始まるまでその喧騒が収まることはなかった。

そんな真理のことをじっとり見つめる視線があった。
他のクラスメイトとは違った意味で。
まるで、品定めするような。

■

そしてなんだかんだあり、昼休み。真理はクラスメイトに囲まれる前にアテネに声をかけた。
「竜崎、昼飯食べに行かないか？まだ場所わかんないだろ？」
「いいですね、行きましょう。」

真理とアテネ、それに大輔と早苗を含めた４人で学食へと向かった。

8話　桐陵高校のアテネ（2）（前書き）

今日は調子がいいので連続投稿～

8話　桐陵高校のアテネ（2）

アテネと大輔と早苗は互いに簡単な自己紹介して一行は学食へと向かった。

学食には食事を求めている生徒で溢れていたため、学食でパンを買い中庭で食べることになった。

さすがに中庭は空いていて心地好い空間だった。

パンを食べながらまず先に口を開いたのは早苗だった。

「竜崎さん、さっきまで大変そうだったから聞かなかったけどいくつか質問しても良いかしら？」

「はい、どうぞ。」

早苗は少し考えて言った。

「正確に、いつこっちに来たの？」

アテネはクラスメイトの前には一週間前と妥当な日にちを言っていた。

「正確には二日前です。何か問題でも。」

すると早苗はじっと見つめながら言った。

「別にどうってことじゃないけど。竜崎さん、本来の話し方で話していいですよ。隠し事は詮索しませんから。」

すると、それまでお嬢様キャラだったアテネの雰囲気がいつもの通りになった。

「いやぁ参ったわ。そんなに変だったかしら。」

「他の人からしたら何ともないと思いますよ、竜崎さん。」
「別に竜崎さんって畏まった言い方しなくていいよ。私のことはアテネで。あなたのことはなんて言えばいい？」
「私は早苗でいいよ、アテネちゃん。」
「やめてよ、ちゃん付けはなんかくすぐったいけど、早苗ちゃん。」

…いつの間にかアテネと早苗は打ち解け合っていた。
真理と大輔は仲間外れにされているようだった。

「あのーなんかキャラが変わってしまった竜崎さん・・・どういうことなんだ、真理？」
「俺だってあんまり竜崎のこと知らないよ
いきなりこの学校に入ってきて・・・どういうつもりだ、竜崎。
自己紹介の時、いろいろと嘘八百言っていたが。だいたい好きなものケーキじゃなくて煎餅だろ。」

「いきなりで悪かったわね、こっちだっていろいろあるんだから仕方ないでしょ。
あの自己紹介だってまるっきり嘘だって訳じゃないわ。
あれも、この学校での最適なキャラ作りの一貫だし。」

「・・・？どういうなの、あーちゃん？」
と早苗。
「別にあーちゃんでもいいけど。
どういうキャラかっていうと、他のクラスメイトからはなかなか干渉されずに必要なときに動きやすいキャラのこと。
一見派手な感じだけど没個性的。」

「…なんか凄いこと言っているようだが、竜崎さん。」
と大輔。

「真理、一つ聞いていい？」
「あぁ、なんだ？」
「早苗ちゃんと安部くんって信頼置ける？秘密事を隠してくれると思う？」

「当たり前じゃないか。二人とも幼なじみだし、早苗はしっかりしているし、大輔はこう見えて口固いし。」

すると、アテネは3人を見渡しながら言った。
「なら、ここだけの秘密にして置いて欲しいんだけど。
…私はある目的があってこの学校に入って来たの。あるモノを追って。」

「っ・・・！」
真理はそのモノに心当たりがあった。アテネの本業は魔法少女だ。
つまり・・・

「そうか、あーちゃんも私と同じなのか。それなら納得がいくわ。」
「「えっ！？」」
アテネと真理の声がハモった。早苗が何を言っているのかがわからなかった。

「ちょっと俺のことを置いていかないで欲しいんだがな。えっと竜崎さんが早苗と同じ魔法少女って訳か？」
「「はぁっ！？」」

なぜ二人してアテネが魔法少女ということを理解したのか、真理とアテネにはわからなかった。
二人とも魔法少女を知っているということになる。

「あれ？真理知らなかったの？私は魔法少女だよ（キラッ」
「おいおい気付いているかと思ったよ、真理。」

「いつからだよ、早苗。」
「中学2年かな、確か。」
「正確には、2年前の7月だぞ。」

「で、大輔はなんなんだよ！？」
「で、安部くんはなんなのよ！？」
また、真理とアテネの声がハモった。
なんなんだ、この展開。

「あぁ、俺は早苗の協力者（サポーター）だ。（キリッ」

「まったく何なのよ、真理。
魔法少女関係ですでに二人の知り合いがいるなんて。目的の一部が終わったけど。」
「知らなかったんだって。
つーか魔法少女の協力者（サポーター）ってなんだ？」

「よくぞ聞いてくれたな、真理。
協力者（サポーター）っていうのは、簡単に言うと魔法少女の仕事を助けるってことだ。
例えば谷の位置の確認とか鬼の接近とかの察知、後は戦いの支援

だ。」
「へー」
真理はいきなりの話についていけなかった。
「で、肝心の魔女に関しての情報は？何かわかってる？」
「いや、まだほとんどわかっていないわ。この学校にいて、まだ活性化していないってことしか。」
「うーん、やっぱり調査が必要ね。」
「そうだね。」
「ちょっと竜崎。魔女ってなんだ？鬼の一種か？」
「魔女っていうのは、女の人の形をしている強大な力を持った人鬼よ。」
「そうなのか。」
「あぁ、もう少しで昼休みも終わりね。この話はまた放課後にね、あーちゃん。
クラスのみんなには内緒だよ（キラッ」
「もちろんよ。」
そして真理達４人は教室に戻った。

8話　桐陵高校のアテネ（2）（後書き）

一週間後に期末試験があるので続きが普通に投稿できるのかわかりません。
誤字脱字等ありましたら教えてください。

9話　桐陵高校のアテネ（3）（前書き）

やっとここまで来た気がします。
厨二っぽくなっていますが、あしからず。

9話　桐陵高校のアテネ（3）

あっという間に午後の授業が終わり、放課後になった。
部活に行く人達が教室を去って、その教室には真理とアテネ、大輔と早苗だけが残っていた。

「一ついいか？大輔と早苗、部活はいいのか？」
真理は確認の意味も込めて聞いた。
「俺は大丈夫だ、一日くらい休んでも変わんないからな。どうせ今日も大貧民やるんだろうし。」
「私も大丈夫だよ。まだ一年だから、体力作り(すぶり)だろうし。私はいつも家でやってるから。」
「そうか。」

アテネは早苗に聞いた。
「じゃあ、昼の続きのようだけど。魔女の痕跡とかは？」
「それはちょうど俺らがここに入って来てから見られるようになったようだな。」
「じゃあ一年生に化けている可能性が高いのね。」
「そういうことになるね。」

真理は気になっていたことを二人に聞いた。
「大輔、早苗。お前らが関係者だと今まで気付かなかったが、いつ動いていたんだ。」
「うーん、夜かな。」
「夜だな。深夜2時くらいまで。」
「よく補導されなかったな。」

「そこは気合いで乗り切ったんだよ～」
「過去に5回ほどされかけたけどな。」
「それはそれは凄いな……」

アテネは大輔に聞いた。
「安部くんって女の子に興味ないの？」
「ん？」
「竜崎、なんでいきなり。」
「あーちゃん何か根拠でも？」
いきなりの発言に三人とも何を言っているのか掴みきれていなかった。

「根拠はね、私の自己紹介の時にクラスの男子はみな私を品定めするような目で見ていたけど、安部くんはそんなに興味のないようにしていたから。
もちろんそう見えただけなんだけど。」
「・・・いやそれは、大したりゆ」
「「大輔はロリコンだから。」」
「・・・そうなの？安部くん。」
「なんで二人してそんなこと言うんだよ、ハハハ。
竜崎さんに誤解されてしまうじゃないか、変態って。」
安部は必死に否定した。
「安部くんっておもしろいのね・・・そこは触れないでおくわ。」
「・・・」

そして、互いに気になっていたことを聞きながら放課後の時間を過ごしていた。
その話にピリオドを打ったのは早苗だった。

「あーちゃん、やっぱり私の強さ、気になる？」
「そうね、さっちゃんの戦力が知りたいな。」
「私もよ、あーちゃん。いくらあの二つ名を持っているとしてもね、共闘するとして強さ知らないとね。」
「早苗、気をつけろよ。怪我しない程度にな。」
「どういう話になっているんだ・・・」

かくて、アテネと早苗の模擬戦が始まった。

■

「じゃあ、ここで良いかな。いくら結界張るにしても人目に付きたくないし。」
「いいわよ。これくらい広ければ。」

早苗とアテネは結界を張る場所を吟味しながら、行き着いた先は近くの公園だった。

「じゃあ、いくよ。」
早苗は虚空から一振りの太刀を取り出し、魔法少女へと変身した。
早苗の服は白を基調とした巫女服で黄色で縁取られていた。元々和服系統の服が似合っていた早苗に、この巫女服はとても似合っていた。さらにあまり飾りのない細身の太刀を携えている姿は凛々しく綺麗だった。
真理は思わず見惚れていた。
「そうだな、誰だってあの姿に見惚れてしまうよな、真理。」
「あぁ。」

早苗は武装を展開し終えるとアテネを促した。
「じゃあ、あーちゃんの姿、見せてよ。」

「わかった。」

アテネは右手にはめた指輪を軽く翳した。
すると、指輪は碧色(みどり)に光を放ち、鎌を虚空から生み出した。
そして服は真理が始めに見たのと同じく、上はひらひらとしたレースであしらわれたドレスを羽織っていた。下はミニスカートでそこから出る生足を惜し気もなく出していて、靴は膝まで覆うロングブーツだった。
「これが私の魔法少女としての姿よ。」

早苗はアテネの鎌を見て言った。
「やっぱりあの法具ね。間近で見られるなんてね。」

真理は早苗の言葉が気になり隣にいる大輔に聞いた。
「竜崎のあの鎌って有名なのか?」
「真理は知らないのか。たぶん、法具についても知らないんだろうな。
じゃあ、まず法具の話からしようか。」

「まず、法具っていうのは魔力を注ぐと特定の効果を発揮するものなんだ。もっともほとんど魔力のいらないタイプのものもあるが。
法具はそれこそ山ほどあるんだが、どこにあるかといえば、魔法協会が保持していたり道端に落ちていたり、鬼が持っていたりする。」
「鬼が持ってる・・・?」
「そうだ、力の強い鬼が使ってくる場合がある。竜崎さんのあの鎌だってそうだ。名前は“グリフィン”で、こっちは名前を知らないが暴風の魔女が元々持っていたそうだ。この魔女との闘いは熾烈を極めて、たしか6人の中規模戦団(パーティー)で挑んで竜崎さんだけが最後まで闘ってなんとか勝ったようだ。で、その鎌は竜崎さんのものにな

ったんだ。」
「竜崎ってそんな凄かったのか・・・」
「そうだね、何回も魔女を屠(ほふ)っているし。竜崎さんの強さはあの鎌だけの力だけじゃないからね、元々の身体能力・魔法攻撃が凄いからね。」
「じゃあ早苗は大丈夫なのか?そんな奴と闘って話になるのか?」
「竜崎さんとの相性もあるし、簡単に負けるとは思わないよ。それに早苗も竜崎さんほどではないけどかなり強いからね。」
「そうなのか?」
「うたぐり深いね、真理は。早苗が持っているあの刀の法具の名は“六連星(むつらぼし)”でこれはおじさんの形をとっていた人鬼(じんき)が持っていたものだ。妖刀と呼ばれていた時期もあったようだ。」
「そんな物を持っているのか、知らぬ間に早苗は凄いことしていたんだな。」
「じゃあ、あーちゃんいくよ!」
「かかってきなさい!」
早苗は“六連星(むつらぼし)”を小さく振りかぶり、アテネに向かって切り掛かった。
対するアテネは“グリフィン”を構え、こちらも同様に切り掛かった。
二人の立っていた地点の中間点で太刀と鎌が交差する。金属同士のような甲高い音が鳴り響く。二人は即座に振り向き、再び切り合いになった。
真理には、互いに力量は同じくらいでありように見えた。
その純粋な得物による切り合いを終わらせたのは、アテネだった。

「南方の風よ、吹き荒れろ。『灼熱の烈風（バーニングストーム）』！」

アテネが魔法攻撃を仕掛け、距離を取った。

対する早苗は、

「轟（とどろ）け！風を伴いて我を運べ！『疾風迅雷（しっぷうじんらい）』！」

自らを雷を纏い、アテネに肉薄した。

・・・

互いにその魔力の許す限り魔法を打ち、得物を叩き付け勝負を決めるべく闘った。

そして、

「爆ぜろ！」

早苗が放った雷の塊が声を合図に中に溜めていた電気を放った。

近くにいたアテネにまともに当たる。

「いっ！くそっ！さっちゃんもよくやるわ。」

「よし！

我に従いし雷の力、ここに集まり参じて敵の仇と為せ！雷は神の落とし物。神の手を離れ暴れ回れ！『雷の騒乱（サンダーパニック）』！」

早苗が膨大な魔力をかき集め魔法を展開していく。

「ついに切り札を使うのか。」

「切り札なんて持っているのか？」

「そうだ、あの雷の騒乱（サンダーパニック）は多くの雷をランダムに配置して解放するから、あの量の雷撃を回避するなんて不可能に近い。ガードしても数がたくさんある雷を前に全て捌ききれるはずがないからな。あれを使うってことは相手にとって死を意味する。」

「じゃあなんで最初からぶっ放さないんだ?」
「あの詠章の長さでか?ある程度相手に隙を作らせないと、詠んでいる間に攻撃されて魔法が失敗する。」
「あぁ、だから雷の球で竜崎を足止めしてたのか。」

アテネは早苗が纏いつつある膨大な魔力の影響を見て厳しい顔をした。

(ということはさっちゃんは、どでかい上級魔法を撃ってくるのね。しかも雷系統の。回避のしようがない・・・
やっぱりアレを使うしかないのか。)

アテネは右手に鎌を構え直し、左手の指輪に自分の意思を送り込む。
『起動。『＊＊＊の眼』展開。ならびに『＊＊＊の風』使用準備』

早苗は自分自身が持つ最強の魔法を撃った。
「いっけ~!」
早苗の周りを漂っていた雷が意思を持つかのごとくアテネに襲い掛かる。逃げ道を塞ぐようにして周りから襲い掛かる。

すると、アテネは鎌を四方八方から襲い掛かる雷に向かって振り切った。
「唸(うな)れ、グリフィン。」

グオォォォン

その鎌から放たれた斬撃は襲い掛かる雷を切り裂き、吹き飛ばした。

そしてそれはアテネの周りに殺到した雷撃全てが吹き飛ばされ、消滅した。鎌の一撃を喰らっていないところまで全て。

雷撃をも消し去る暴風の中、眼の色を金色にしたアテネが、そこに無傷で立っていた。

早苗は一瞬呆然する隙に、アテネは鎌を再び構え直した。

「『加速(アクセル)!』」

アテネは早苗の懐まで急接近し、鎌の峰の方で脇腹を打った。その一撃で早苗は吹き飛んだ。

■

「やっぱり、あーちゃんは強いね。」

「そんなことないよ、あそこまで追い詰められたの久しぶりだよ。ホント、危なかった。」

「そう、最後のアレ、なんなの?私の切り札吹き飛ばした魔法。」

「あれは・・・何というか、身体強化と武器強化を二重に掛けたかんじかな?」

「なんで疑問形!?」

「よくわからないの、ハハハ・・・」

そして、模擬戦を終えたアテネ達は家路に着くのだった。

9話　桐陵高校のアテネ（3）（後書き）

学校の方で試験があるため、しばらく更新できないと思います。
お待ちください。

１０話　アテネと真理（前書き）

まだ試験中ではありますが、更新しときます。

・・・あっ、試験死んだ（笑）

１０話　アテネと真理

真理とアテネは帰る道すがら、近くのスーパーに晩御飯の材料を買いに寄った。
そのスーパーには、けして多いとは言えないほどの客がいた。客のほとんどがおばさん達である。
そんな中二人で食材を選んで歩いている姿は、まるでカップルのように見えた。

そんな二人は店内で、
「なんでウインナーとか入れてるの!?まだ家にあるじゃない！」
「だって今日だと、三割引きなんだぞ!買うしかないじゃないか！」
「だからって一気に１０袋も買う人いる!?」
「いや、いくつあっても足りないだろ。」

わいわいがやがや

そんな二人は周りの視線に気付くことなく買い物をした。

■

そして、夕食を食べ終え、真理はアテネとテレビを見ながら今日の話をした。
「どうやって短時間の間に学校に転入できたんだ?」
「答は簡単よ、先生の中に私の知り合いがいたの。」
「えっ?」
「たぶん早く用意できたのは、教頭の白鳥さんよ。
あの人、元魔法少女で私にいろいろなことを教えてくれたのよ。

最近会ってなかったけど、昨日頼みに行ったら、すぐに用意してくれて。」
「早過ぎだよ、それ！なんで手続きを一日かからずにやれてしまうんだよ。
つーかあの人までも魔法少女だったんだ・・・」
「正確には、“元”よ。」
「魔法少女に“元”もあるのか？」
「体力などの理由で、直接は戦闘はしないけど現役の支援をしてくれるのよ。
何度手伝ってもらったかな。」
「へぇー」

真理の一つの疑問が解けた。
なぜ、白鳥先生がいきなり自分を見に来たのか。
竜崎が自分の名前でも出したのだろう。

「あの学校に魔法少女がいるなんて今でも信じらんないぜ、なんていったって今の今までそういうのと無縁だったからな。」
「そうね。」

「そうだ、コーヒーでも飲むか？インスタントしかないが。」
「ありがたく頂くわ。」
そして夜は更けていく。

「そういやさ。」
「何？」
「戦う時に竜崎ってあの大振りの鎌を出すじゃないか。」
「うん。」
「他の魔法少女もなんらかしらの武器を持っているのか？」

「そうね、中には武器を使わない人もいたね。
そもそも、魔法少女の武器には2種類あってね。
一つは魔力を使って武器を一から構成するやり方。これは成り立ての人とかがよくやるわ。」
「あぁ、なんか魔法少女らしいっていうか。」
「ふふ。で、もう一つは、法具っていう物ね。」

真理は夕方の大輔が言っていた話を思い出した。
「魔力を注ぐと特定の効果を発揮するものだっけか?」
「良い説明ね、誰が言っていたの?」
「あぁ、大輔が教えてくれた。」

「安部くんもなかなかね。
そう、法具を武器として使う利点は、一から構成するよりも必要な魔力が少なく済むし、強度も火力も上なのよ。
ただ入手するにはある程度強くないと手に入れられないから。
持っているということはある種ステータスなのよ。」

「そうだったのか、魔法少女が皆が皆持っているのかと思ったよ。」
真理は話しながらあることに気付いた。

「竜崎、その鎌の名前、グリフォンじゃなくて、“グリフィン”なのか?」
「そうよ、グリフォンじゃなくて、“グリフィン”よ。全然違うよ。」

「じゃあどう違うんだ?てっきり鷲獅子(グリフォン)の呼び間違えかと思っていたんだが。」

するとアテネは手に持っていたマグカップをテーブルに置き、座り直した。
「グリフィンっていうドラゴンがいて、その力を中に持っているのが“グリフィン”よ。
正しくはそのドラゴンの名前は、碧鰭竜（グリーン・フィン・ドラゴン）よ。かなりの強さを誇るわ。」
「そんなのがいるのか・・・？」
「さすがに街とかには滅多に出て来ないけど辺境とかにはいるわ。一般人からは視認が難しいから、竜巻とか雪崩とか災害と考えられているね。本当はそういった奴らのせいなのに。」
アテネの言葉の最後は愚痴になっていた。過去に何かあるようだった。

「知らぬが仏なんじゃないのか？そういった災害の正体がドラゴンでしたっていわれても困るだけだし。
自然現象によって被害に遭うのなら諦めがついても、ドラゴンとかの化け物が暴れたせいですっていわれたら“なんで私達が”ってなるだろ。
だから一般人は知らなくていいんじゃないか？そういうのを知っていて退治するのは専門家でいいんだよ。」
「そうかな。」
「そうなんだよ。」
「ふふっ、真理っておもしろいね。」
「いきなりなんだよ。
そーいやさ、昼の話の続きだけど、学校に魔女がいるって本当か？かなり恐いんだが。」

「もちろん、いるわ。だけど、私が消し去る。」
「頼もしいな、さすが竜崎だ。で、俺は一応何に気をつければ？」
「そうね、あまり一人にならなければ大丈夫だと思う。

とりあえず奴らが気付いているかはわからないけど、真理は一応普通の生徒とは持っているモノが違うから気をつけてね。」
「なんかそう言われると照れるな。」
「人がせっかく心配しているのに。ふん。」
「すまん、すまん。悪かったって。」
「もう許さないんだから。もう、寝るわ。」
「へいへい、おやすみ。」
「おやすみ。」

パタパタとスリッパを鳴らして2階の寝室に行くアテネ。
そんな姿を見ながら真理は誰かに聞かせるわけではなく呟いた。
「竜崎が俺のことを“真理”って呼んだのか。なんか良いな。
このまま済めば良いんだがな。
何か失いそうな気がする。嫌な感じだな。」
真理は心のどこかで悪い予感を感じとっていた。

果たして未来がどうなるかなぞ、誰にもわかる訳がない。
わかるのは神だけである。

■

そこは夜の森。生きとし生けるものが眠る丑三つ時。森自体が眠っていた。静寂の世界が広がっているのだった。
その静寂の中、一人の少女が歩いていた。白いブラウスに裸足で歩いていた。ブラウスの裾からは何本ものチューブが垂れ下がっていた。

彼女が歩いて来た方には大きな病院がある。どうやらそこから歩いてこの森まで歩いて来たようだ。

彼女の周りには蝶が舞っていた。彼女はそれでいて異様な雰囲気を漂わせていた。人が見たら身がすくむような。

彼女は森の中心にある大きな木の根本の前で立ち止まった。どうやらここが目的地のようだ。

その大樹は太古の昔からそこに在りこの森を支えてきた。それでいて精気を蓄えていた。

「では少し戴くとしよう。」

少女はか細い声で、それでいと妖艶な声色で言った。

そのまま少女は大樹の中に消えていった。

ここは人の喧騒から少し離れ人から忘れられた場所、『常盤（ときわ）の森』。

その夜に近くにある病院で首筋に傷痕がある死体が何体も見つかり、患者が一人消えた事件が起きた。

それでもこの森は静かであるのだった。

１０話　アテネと真理（後書き）

続きは試験後に・・・

11話　忍び寄る影（1）（前書き）

成績があまりに散々だったため更新遅れました！すいません。次からはなんとか早く更新できるように善処します。

11話　忍び寄る影（1）

翌日。
いつもの朝のように朝食に米と味噌汁を用意する真理。いつもと同じ光景。
それまでと少し違うのは、自分のを用意する横にもう一人分を用意していることだ。
しばらく自分だけの食卓だった。夕食とかだったら、大輔や早苗の家にお邪魔して戴いたことはある。
しかし、朝食はそうはいかない。
誰もいないリビングルームで一人食べる他ない。

真理の母親はほとんど家にいない。たまにいると思えばすぐにどこかに行ってしまう。
しかし、真理が小さい頃からそうだった訳ではない。
真理が中学1年の秋頃、つまり二年半前だ。

真理の母親：神内純子（じんないじゅんこ）は息子から言わせると、“何をしているかわからない”人だ。
何かの仕事をしてお金を稼いでいるようだが何なのかわからない。
真理は以前何度か聞いてみたことがある。何度聞いても教えてくれなかった。
曰く、教えるにはまだ早いのよ、と。

そのおかげで真理は料理と掃除の腕が上がった。
しかし、なかなか自分以外の人にその腕前を見せる機会がなかったのだ。
アテネがこの家に居候することになり、真理は腕の振るいようがあると思っているのだった。

また、久しぶりに誰かと同じ家にいることの喜びを噛み締めていた。

「おはよ～」

寝ぼけたままのような声を出しながらアテネがリビングルームに下りてきた。

「おぅ。朝食用意しておいたぞ。」

「ありがとー」

アテネは覚束ない足取りで椅子に座る。そして半分寝たままご飯を口に運ぶ。そんな様子を見ながら、真理は笑っていた。

アテネは朝が弱い。なんとか時間通り起きることはできるが、だからといって目が覚めている訳ではない。

半分寝ているのだ。いつも毅然としているのに対し、朝はこんな感じである。

そのギャップがなんとまあ、かわいいのである。

「ＺＺＺ・・・」

アテネはご飯を食べながら寝ていた。

そんなアテネの様子をずっと見ていたいと思っても、学校に遅刻しないことを考えるとそうもいかない。

だからこそ真理は心を押し殺し（？）、目を覚ませることにした。

真理は冷蔵庫に行きある物を取り出した。そしてそのまま、アテネの後ろに立ち、その無防備なシャツの背中の中に掴んでいた物を放り込んだ。

「ギャァーーーー」

背中に氷を入れたのだ。氷はＴシャツと背中の間を通り抜け椅子の上に落ちた。

ほんの一瞬だ。これがずっとなら拷問であるが、これくらいなら赦される範疇だろ、と真理は誰に言う訳ではないが心の中で言い訳していた。

「なっなにしてんのよ、しんり・・・」

「目が覚めただろ？」

「うっ・・・びっくりしたじゃない。」

アテネは自分がまだご飯を食いかけたまま寝てしまったことに気付きながら言った。

「次からはちゃんと言ってからやりなさい、まったく。」

「寝ぼけているから悪いんだ。ほら、早く食べろ。遅刻するぞ。」

「はいはい。」

そして彼らの一日は始まった。

■

「うーん。」

ここは朝の職員室。まだここにいる教師は少ない。まだ授業まで1時間ほどあるからだ。

唸っているのは福井先生だ。福井先生は生活指導の役目があるため、朝早くから学校にいる。

生活指導と名は付いてはいるが、実際は何でもかんでもやる役職だ。生徒の風紀から学校の治安、備品管理などやることがたくさんある。

いつものように自分の机にどかりと座り一杯コーヒーでも飲もうとした時に、白鳥教頭に呼ばれたのだ。

用件は学校の不審者の出没に関してだった。
この学校は、地方都市の神川市（かみかわ）の中心地から北西に位置し、尚且つここら一帯に広がる丘陵地形の中で高い部類に入る桐陵ヶ丘に立っている。
だから用のある人しかこの学校に来ないのだ。
故に不審者が出ることは不測（イレギュラー）の自体なのだ。

それがここ2週間ほどで不審者の目撃情報が十数件ある。
まだ直接的な事件は起こってはいないが、何が起こるかわからないため対策を立てろ、とのことだ。
とりあえず部活動に関しては制限をかけたのこと。
それ以外で何か案を出さなければならない。

「……うーん」
しかし、考えてもなかなか良い案が思い付かない。
そろそろ授業の準備をしなければならない時間になっていた。

「まぁいい。後で考えるとしよう。」
福井先生は考えることを後回しにし、授業の準備に取り掛かった。

■

真理とアテネは無事に遅刻することなく学校へ着いた。
二人が並んで歩いているのところに、早苗が声をかけてきた。

「おはよー、真理とあーちゃん。」
「おはよう、さっちゃん。」
「あぁ、おはよう、早苗。今日は朝練ないのか？」

真理が聞くと、早苗は少し驚いた顔をした。
「そうだ・・・真理は部活やってなかったんだったね。
えぇっとね、昨日の夜に先輩からメール来て、当分全ての部活の朝練はないって話なんだよ。
なんか不審者が頻繁に出没するからしいけどね。」

「へー、そうだったんだ。いや、しかし不審者なんて出るのか、こんなところに。」

「不審者ね・・・。タイミングが良すぎるわね。」
アテネはぽつりといった。
「ん?あーちゃん、どうしたの?」
「それ、ただの不審者じゃないかもしれない。」

アテネは人目を気にしながら言った。
「どこで聞かれているかわからないから、後で話すわ。一応言っておいた方がいいからね。」
「そーいうのどんどん教えて欲しいなー。何かがあってからじゃ遅いからね。」
「そういえば早苗。今日委員会じゃなかったか?」
「あっ、いけない。昼休みもその準備があるんだった。あー忘れてた。」
「じゃあこの話は放課後、委員会が終わってからね。」

そして3人は校舎の中へ入っていった。

■

授業が恙無(つつがな)く終わり、そして放課後になった。
早苗は自治委員会（クラスをまとめる役割の委員会のことである。

）へ、大輔は用事があるからと言い早々と帰り、教室には部活動をしていない真理とアテネが残っていた。

「竜崎は部活しないのか？あんだけ勧誘されてたし。」

そう、アテネは美女の転校生ということで学校中で有名になっていた。

その結果、昼休みの間ずっと部活動の勧誘をされ続けていた。

だが、しかし

「別に入りたいのないし、これがあるからね。」

と言いながら指に嵌めたリングをぷらぷらさせた。

「そういう真理だって部活入ってないじゃない。」

「あぁ、そうだな。別に入りたくないんだったらいいんだよ。

で、早苗を待っている間どうするんだ？１時間くらいかかるぞ。」

「せっかくだから学校の中でも見て回るわ。案内よろしくね。」

「はいはい、任せろ。必要そうなところだけどな。いいかい？」

「もちろん。」

こうして二人は学校を回ることになった。

11話　忍び寄る影（1）（後書き）

いよいよ次からアテネが大暴れします。

12話　忍び寄る影（2）（前書き）

やっと書きました。お楽しみください。

12話　忍び寄る影（2）

真理とアテネは校舎の中を見て回ることになった。　この学校は周りに何もないせいか広い。校舎はコの字形をしている。正門から入ると、正面に大きなグランドがありその周りを囲むように校舎が立っている。　しかし、その大きさが尋常ではない。校舎を端から端まで歩こうとするとゆうに30分はかかるのだ。あまりに校舎が大きくて、卒業する頃になっても知らない部屋があるなんてざらにある。そもそも何のためにあるのかわからない部屋もあるのだが。

「ほんと～に広いわね。」

「あまりに広くて普段使う教室を覚えるので精一杯だ。迷う人が多いんだそうだ。」

真理とアテネは第一体育館の前に来た。体育館はいくつかあり、この第一体育館は学校の東側に位置し、授業や部活動などで使われる。特に球技が行われる。もう一つ生徒が使う体育館は第二体育館といい、こちらは学校の西側にあり、剣道や柔道などが行われる。ちょうどこの時間はバスケ部が活動していた。

「さすがに大きいわね。」

「俺も初めて見た時驚いた。」

確かにこの体育館は大きい。特に玄関部分が広く取られている。

「授業で使うから迷わないように覚えないといけないぞ。」

「わかったわ。」

真理とアテネは当たり前のような会話をしてこの体育館から次の場所へ移動することにした。

するとアテネはあるモノを見付けた。
「っ、やっぱり・・・」
アテネは思わず声を上げていた。
「なんだ、あれは。噂の奴か。」
真理も気が付いた。

二人の視線の先には音もなく金網を切り裂いて敷地内に入り込む不審者がいた。全身黒ずくめで顔はトレンチコートの襟に隠れていてよく見えない。身長はゆうに２ｍを越えているようだった。
とにかく怪しかった。

「真理はそこで待っていて。あいつを片付けてくるわ。」
「なんか関係あるのか？」
真理はアテネの焦る様子を見て、当然の疑問を口に出した。
「あれは私が追っている鬼の一味よ。ここで潰さないと。」
「大丈夫か？」
怪訝な声をかけられると一瞬困ったような顔をしたが、すぐにアテネは引き締まった顔つきになり言った。
「私の辞書には不可能という文字はないわ。ただ敵は倒す、それだけよ。倒せないはずがないわ。」

そういうなりアテネはその不審者（エネミー）に向かって走り出した。

■

「七色の砲台、稼動！」　直接距離にして５０ｍ。アテネは七色の光を纏い、敵との距離を１秒で縮めた。
そしてアテネはいつの間にか取り出していた鎌を叩きつけた。

ガツン

相手がただの人間なら叩きつけられた衝撃で原形を留めることなく吹き飛んでいただろう。
しかし、その不審者は片腕だけで防いだ。

「もっと慎み深くしてほしいものです、お嬢様（レディ）。」
「チィッ」

アテネは飛び下がり距離を取った。
その不審者は片手を胸の前に掲げ頭を軽く下げた。

「私の名はデュナミス。紳士として私の邪魔をするお嬢様（レディ）と少しばかりお付き合いお願いしたいですね。」

「どこが紳士よ！？ただの不審者じゃない。『風よ、百条の矢となりて敵を射よ』」

グワァァァッ

アテネの声と呼応するがのごとく、アテネの伸ばした手の先から無数の揺らめく風の矢がほとばしった。
その様子を見ながらデュナミスは慌てることなく右手を伸ばした。
「影鬼道第参幕（えいきどう）、守影（しゅえい）、きたれ。」

デュナミスの手の先から薄く体の大半を隠せるほどの大きさの黒い楕円の膜を作り出した。
その薄い膜が出来上がるのと同時に無数の風の矢が突き刺さった。

風が空気を叩く音が甲高く鳴り、攻撃の余波で辺りはつむじ風が巻き起こった。

しかし、デュナミスは傷一つなくそこに立っていた。そして破れかけの黒い膜をしまい、拳をひいた。

「とんだじゃじゃ馬ですね、お仕置きの時間です。」

その刹那。

アテネの矮躯(わいく)が吹き飛び、少し先の地面に叩き付けられた。

デュナミスは一瞬の内にアテネがいた位置で右手を伸ばした状態で立っていた。アテネを吹き飛ばしたのはその右手から放たれた掌底だった。

「ほら早く立ち上がりなさい、まだお仕置きは終わっていません。」

アテネはのろのろと立ち上がった。かなりのダメージを受けたようだ。

「黙れ、変質者。　もう口をきけないようにしてやるわ。『風槍(ふうそう)』展開。」

アテネの左手には風が渦巻く槍が握られていた。

「喰らえっ！」

アテネが距離を詰めて槍を叩き付けてもデュナミスは黒い膜で攻撃を防ぐ。鎌を振り抜いても、それまた腕で防ぐ。一向にデュナミスはダメージを受けていなかった。

「影鬼道(えいきどう)第伍幕、影槍(えいそう)、きたれ。」

デュナミスがそう言うと、立っている周りの地面が黒く蠢(うご)いた。

そして黒いビームのような槍がアテネに向かって刺し殺さんばかり

に勢いよく伸びた。
「くっ・・・」
アテネは手にしている鎌で振り払いそれらから身を守った。しかしいくらか捌ききれなかった分を披弾した。
「絶対に倒す・・・」
かなりダメージを受けながらも、アテネは鎌を振り上げ魔法を打ち出しながら攻撃を仕掛ける。本来なら離脱を念頭に考える戦況だが、アテネは逃げなかった。なぜなら守るべきものがあるから。
どうみてもアテネの不利だった。力の差というよりも相性の問題だった。本来は影を使う敵に対して光や炎が有効である。また、遠距離攻撃が相性がいい。
しかし、アテネはどれもあまり得意ではなかった。近距離攻撃を得意とし、風や水の魔法を使うアテネには最悪の相手と言っても過言ではない。
（アレが使えれば一発逆転することができる。）
アテネにはいくつか切り札があった。それらを使い、今までもこういった危機を乗り越えてきた。
この影使いの鬼を倒す切り札は手の中にあった。すでに準備の半分を済ませてある。
しかし、
（詠唱するだけの時間が取れない。）
敵の攻撃をあと1秒だけでも止められたらいい。それだけでこの

切り札の最後のピースは埋まる。
（どうにか奴の攻撃を止められるものはないか・・・）

「そろそろ終わり（フィニッシュ）といきましょうか。
影破道（えいはどう）第壱幕、影鎮（えいちん）、舞い降りれ。」

ゴゴゴゴゴォッ

アテネの真上に直径５ｍほどの真っ黒い禍々しい雰囲気を漂わせる球体が浮かんでいた。
「終わりです、墜ちよろ！」
デュナミスが言うやいなやその球体はアテネを押し潰した。
・・・いや、押し潰そうとした。

「・・・？」
アテネは球体が一向に自分を押し潰さないことに違和感を覚えた。つい閉じてしまった目を開けてみて、驚いた。
だれかがいる。
焦点が合ってまた驚いた。
そこには右手を伸ばし禍々しい球体を受け止める神内真理（じんないしんり）が立っていた。

■
それはアテネが影の槍の攻撃を受けている時だった。
それまで後ろの方で先生達に連絡していた真理は思った。
このままでは駄目だ、と。
（このままだと竜崎は勝てない気がする。どうにかできないか。）

そして一つの考えに至った。
（もし、俺に異能の力が宿っているなら、なんとかなるだろう。さて、どうやろうか。）
ふと、見るとアテネの真上には敵の攻撃であろう球体が浮かんでいた。
すると真理の頭からは何もかもが消え、気がつくとアテネの元へ走っていた。

■

「なんで、アンタがいるのよ。危ないから逃げてくれれば良かったのに。」
アテネは涙ぐんでいた。
「気がついたらこうしてた。」
真理は少し照れ臭くなり多少ぶっきらぼうに言った。
「どうやら俺にはこういった魔法みたいなものを弾くことができるみたいだな。」
「えっ」
真理の手の先数ミリのところで球体がギチギチいわせて止まっていた。
「さすがに掴むことは無理っぽいけど、いけるだろ、竜崎。俺が奴の攻撃弾くからお前が攻撃を加えろ。」
「何言ってる・・・の？」
「だから俺も戦うって話だ。一緒に奴をぶっ飛ばそうぜ。」
アテネは目を擦り、調子を整えた。
「うん、いくわよ、真理！」

■

「なぜ、影鎮（えいちん）が消えないんだ？久しぶりに使ったからですかね。調整が必要ですね。」

デュナミスはアテネがいる位置に背を向け、目的を果たそうと歩き出した。

すると、後ろから殺気を感じた。振り向き様に影槍を繰り出した。

「また新手ですか。」

そして向かってくる相手を見て驚いた。

先程殺したはずの少女と初め一緒にいた一般人のはずの少年が追いかけてきたのだから。

「ふん。」

真理は迫り来る影槍を手刀で弾いた。力を入れないと逆に弾かれそうだったが、特に問題はなかった。

アテネは真理が弾いたおかげで空いた空間を駆け抜けながらデュナミスに接近していった。

「なんなんですか、その手は?!」

デュナミスは自分の攻撃が弾かれる様を見て驚いた。今までかつて素手で弾かれたことなぞなかったからだ。

アテネはデュナミスから少し離れたところで立ち止まり、鎌を地面に突き付けた。

「内に秘めたる力を解放する。翠鰭竜（グリフィン）！」

突き立てた鎌がその叫びと呼応し翠色に輝く。鎌の中に閉じ込められていた何かが鎌の形を借りてここに現出した。デュナミスがアテネの様子に気付いて影槍を繰り出すが途中で真理に弾かれる。アテネは鎌を両手で構え、倒さなければならない敵へ駆け出した。

「うあぁぁぁぁぁあ！」

デュナミスは向かってくるアテネを見て恐怖を覚えた。今まで感じたことのない、自身の消滅に対しての恐怖。

そしてアテネは鎌を切り付けた。その斬撃はデュナミスの身体を真っ二つに切り裂いた。

「ぐはっ、あぁぁァァッ！」

デュナミスの断末魔の叫びが辺りに響き、デュナミスの肉体は光の粒子になって消えた。

「終わったのか？」

真理は尋ねた。

「そうね。」

アテネが答える。

「これで一件落着ね。」

12話　忍び寄る影（2）（後書き）

感想と会見とか待ってます。

追記：ちなみに真理は某禁書の主人公ではありません。持ってる能力が違っていますし、あんなに説教はしませんし。髪もツンツンではありませんですし。

１３話　束の間の休息（前書き）

ついに話も佳境に入ってきたかと思われます。今回からは少し能力者に視点を当てていこうかと思っています。

13話　束の間の休息

そして少しして白鳥教頭がやって来た。
ちぎれたフェンス、地面に空いた数々のクレーター、そして真理とアテネのぼろぼろな姿が今回の戦闘を生々しく表していた。

「大丈夫でしたか？」
「はい、なんとか無事に。」
「俺も怪我はありません。」
白鳥教頭は二人に一言聞くなり、後は任せなさいと言った。
ふとデュナミスがいた位置を見ると、黒いコートが一着落ちていた。それを白鳥教頭は手に取りどこかへしまった。

二人は少しばかり様子を見ていたが、とても疲れていたので白鳥教頭に後を任せ帰途に着いた。

■

翌日。
この事件はなかったことになっていた。いつの間にかにフェンスは直され、地面も整備されていた。
「まぁ、こうなるとは思っていたけどね。」
「しかし、よくごまかせたよな。そんなに明るみに出るのが怖いのか。」
「そういうものよ。」
真理とアテネは周りの様子を見ながら昨日の話をしていた。

「結局アレは何が目的だったんだ？」

「たぶん秘宝が目的だったんじゃない。私もよくは知らないんだけどね。」
「ふーん。」

二人が教室に着くと、早苗がすでにそこにいた。
「昨日はどうしたの？委員会終わった後ずっと待ってたんだけどいなかったのは何でだったの？」
すごい剣幕だった。
「そのことなんだけどね・・・」
アテネは少し声を潜めて昨日の顛末を教えた。

「大丈夫だったの？怪我はなかった？」
早苗は驚いた表情で聞く。
するとアテネは真理に向かってアイコンタクトを取った。真理の“力”について話してもいいか、と。
真理はそのまま頷いた。

「・・・という訳。だから私は奴からの攻撃を受けながらも勝てたんだよ。」
「そうだったんだ。気付かなかったな、真理のこと。」
「いや、俺だってそんなことが出来るなんてやってみてわかったことだし。そもそも俺自身がそういったことを知らなかったからさ。別にそんなに落ち込まなくても。」
「幼なじみのこと全部知っていると思ったのに・・・」

教室の隅で話している真理達のところに大輔がやって来た。
「何話してるんだ？」
「大輔、それがね・・・」
早苗は先程自分が聞いた話を教えた。
「何だと、それは本当か、竜崎さん。」

「そう、本当だよ。」
「やっぱりあの話はデマじゃなかったのか・・・」
「「「えっ？」」」
三人の疑問の声がハモった。
「いや、あくまでも噂だったんだが、かなり広まっているんだ。たぶんその鬼もそれを聞いてここに来たんだと思う。その噂っていうのが、『桐陵という名の入れ物に、世界の理を変える秘宝が眠る』なんだ。つまりここに秘宝があるって話なんだ。」

■

６月１２日。ちょうどアテネが転入してきてまる一週間が経った。掲示板には三日前に行われた中間試験の成績が一斉に張り出された。中間試験は現代文・数学・英語の３科目で、３００点満点の試験である。３００人あまりの高校１年生にとっては入学してから初めての試験である。

「うわーもう張り出されたのかよ。」
真理は思わずぼやいた。
「私どのくらいだろ。全然勉強してなかったからなぁ。」
アテネも呟く。

そして二人は掲示板に張られた紙から自分の名前を探し出した。

１番　竜崎アテネ　２９８点
２９４番　神内真理　７４点

「・・・・・・」
「・・・・・・真理、勉強したの？」
「やったはやったんだよ。ただ、俺には難しすぎなんだ。」
「次からはちゃんと勉強しないとね、真理。」
「・・・善処します。」
「今度勉強みてあげるから、ね。」
「お願いします。」
その日の夜から学年底辺の真理は、トップのアテネに勉強を見てもらうことになった。

二人が話している後ろから話し掛けてきた人がいた。

「よぉ、お二人さんはどうだったかい？」
小林レオだった。
「私はよかったんだけど神内くんがね。」
「かなり悪かったんだ。そういう小林は？」

するとレオは不敵な表情を顔に貼付けて言った。
「聞いて驚くなよ・・・」
「もったいつけるなよ。」
「なんと！総合点５２点で２９９番だ。すごいだろ、後少しのところで３００番台を免れたんだからな。」
「「・・・・・・」」

なぜそうもうれしそうなのか、真理とアテネにはわからなかった。
ただ一つだけわかった。こいつバカだと。

■

二人とレオが教室に着き鞄を置くなり、彼らの隣のクラスから騒ぎ声と悲鳴が聞こえた。
「なんだ!?」
「とりあえず行くよ。」
教室を飛び出し、隣の教室を見た。
そこは、阿鼻叫喚の巷と化していた。教室にきれいに並んでいるはずの机があらかた吹き飛び、生徒の内何人かは血を流して倒れていた。
惨状の中心には一人の生徒が無傷で座っていた。拳はきつく握られ唇を噛み締めていた。

「何があったの!?」
アテネは近くにへたりこんでいた女子生徒に聞いた。
「はいっ、実はさっき塩田(しおた)君が、あっそこにいる彼です。えっと塩田君がアイツらに絡まれたらいきなり叫びだして、そしたら机とかが吹っ飛ばされて・・・何が何だかわからなくなって。」「アイツらって?」
「塩田君の近くで倒れてる、クラスの中での不良みたいな3人組です。」
「そう、じゃあもう一つだけ。」
「はい。」
「いきなり勝手に吹っ飛ばされていったのね?」
「そうです、何もないのに勝手に・・・」
「わかったわ、ありがとう。」

アテネは話を聞くなり真理の耳元でささやいた。
「どうやら塩田君は能力者ね。しかも念動力(サイコキネシス)のね。」
「そうなのか。で、どうするんだ。」
「うーん、いくら危ないからといっても吹き飛ばすのは駄目だよね・・・」

「いや、さすがにここ3階だから危ないだろ。」
「気絶させるだけって難しそうね。」

アテネと真理が話している後ろで、レオの顔に焦燥の色が浮かんだ。

教室の中央に座る塩田が再び叫び出した。
「なんでお前らは俺の邪魔ばかりするんだぁぁぁ！」

教室にある机や荷物のいくつかが宙に浮かび、辺りに撒き散らされた。
「ふんっ、魔法起動：風の防壁！」
アテネは真理を庇い、制服のまま魔法によって楯を作り出した。

いくつかの物が壁に当たり凹ませ、倒れていたり廊下にいたりする生徒達にも飛んできた。
すると、アテネの後ろにいたレオがいきなり塩田の方へ走り出した。

レオはそのまま床にあった何かを拾い、飛んできた机から身を庇った。
「何やってるんだ、小林！」
真理は思わず叫んだ。

しかし、レオは微笑みを浮かべながら拾ったものを大事そうに持っていた。
それは一匹のネズミだった。立ち止まっていたネズミに飛んでくる机から庇ったのだ。
レオはそのネズミを2、3回撫で、地面に降ろした。そのネズミはどこかへ走っていった。

「おい、小林。大丈夫か?」
レオのやったことより無事かが心配だった。
するとどこからか虎が入って来た。
その虎は、いわゆるアムール虎といって、体長3mもの大きさのかなり大きい虎である。また、ロシアや中国に生息し、絶滅危惧種に指定されているため、間違ってもこんな場所にいる訳がない。

そんな虎がレオのところに来てぽすっと座ったのだ。まるで頭でも撫でて欲しそうにしていた。
「よく来たな、こんなところまで。ご苦労様。」
レオはその虎に向かって喋り頭を撫でた。

そんな様子を見ていた塩田は気絶した。

13話　束の間の休息（後書き）

新キャラ出てきました。次はこの話の後編という形です。お待ちください。

１４話　事件の収束（前書き）

小林レオの正体は如何に！？

・・・度重なるご都合主義・テンプレには目をつぶってください。

１４話　事件の収束

その後、生徒の誰かが呼んだらしい先生達がやって来て事態の収拾にあたった。怪我している生徒を保健室や病院に運び、倒れ壊れた物を片付けた。事件の当事者である塩田は気絶しているため様子を見るという目的で保健室に送られた。

事件を目の当たりにしていた真理達はさっさと引き上げた。事情を話しても面倒なことになるからだ。

そして、始業のチャイムが鳴ったが真理達は自分達の教室に戻らなかった。その日の授業は全部自習になっていた。

アテネと真理、それにレオを加えた三人は屋上にある大きなテラスまで来た。

アテネはガラガラに空いたテーブルの中から一つ選び、４つある椅子の内１番下から上がってくる階段に近い方に座った。脚を組んで。

「真理、小林くん座って。」

アテネの話し方は他のクラスメートに対してのそれではなく、真理に話し掛けるくだけた話し方だった。

真理はアテネの言動に何かを感じすんなりと、レオは断る理由がないためしぶしぶと座った。

「小林くん、取引しない？」

アテネはいきなり持ち掛けた。

「・・・・・・」

レオは押し黙ったままだ。

「君が能力者だというのはもうわかっている。その能力（ちから）について話してくれれば、皆には黙っていてあげるわ。どう？」

レオはしばらく黙り、おもむろに口を開いた。

「まさか竜崎さんにこんなこと言われるとは思わなかったけどねぇ。何が目的なんだい？」

アテネは口元を緩ませ言った。

「目的ね。そんなの簡単よ。貴方を仲間に引き入れたいのよ。」

真理はアテネがこんなところに来た意味を知った。このテラスは昼時には人が集まるが、今この時間は人一人来ない。つまり他人に聞かれてはマズイことを話すにはもってこいだ。そしてこのテラスの出口は一カ所しかなく、それは階段だ。階段に近い席にアテネが座ることで逃亡を阻止することができる。

そして何よりテラス故の開放感だ。普段話せないこともこの雰囲気のために口が緩むだろう。

アテネはそれらを計算してこの場所を密談の場所に選んだのではないか。

「あまり時間がない。いつどこでこの学校が敵に襲われるかわからない。そのためにも仲間が必要なの。」

レオはニヤリと笑った。

「なんだ面白そうじゃないか。いいぜ、力になれるならやってやろうじゃないか。」

「交渉成立ね。」

アテネは脚を組み直した。隣に座る真理にはその様子がよく見えた。スカートからのびる綺麗な脚がするりと動く様子を。

・・・真理は鼻から何かが出そうになるのを押さえた。

「で、小林くんの能力は？」
「レオでいいぜ。
で、話してもいいんだが、先に竜崎さんは何者が教えてくれないか？」
「いいわよ、レオくんも聞いたことはあるかも知れないけど魔法少女って知ってる？」
「やっぱりか、その話か。道理でなるほどな。
・・・さっきの質問に答えるならＹＥＳだ。よく知ってる。」
「後は言わなくてもわかるね。付け加えるなら、能力者に危害を加える魔法少女らは私の敵の一つよ。見付けたらボコボコにしているわ。」
「そうか、ならいいんだ。
で、真理は？」

レオは真理を見た。
「俺には魔法やそんなものをまとめて弾く力を持ってる。だけど、」
「真理は能力者ではない。ＳＡＳ（→超能力者協会のこと）に問い合わせたけど、どうやら違うみたい。」
真理の言葉を引き継ぐ形でアテネは言った。
「へぇ、凄いじゃないか。さて、俺の能力について話しますかな。
俺の能力は、分類では愛獣飼育なんだが、俺のは中でも特筆していて獣王の資格なんだ。」
「さっきのはその能力ね。」
「そうだ、これは一度触れたことのある動物に効果がないが、動物と会話ができたり呼び付けたりできる。」
「なるほど・・・」

「あまり戦闘とかには向かないけどな。」
「だけど情報収集に向いている。違うかしら。」
テラスに6月にしては珍しいからりとした風が吹く。
「そこまでわかるのか。」
「話と様子で大体わかるよ。たぶんうまく使えば試験も良い点数を取れるんじゃない？」
「たしかにそうだよな、ネズミとかに他の人の解答用紙を見させてとかか。
でもネズミとかが解答用紙の中身を理解できるのか？」
真理もそれに自分の意見を乗せる。
「そうかその手が合ったか！いやーその発想はなかった。」
レオがその話に心底驚いたかのようにした。
「いろいろと応用の余地がありそうね。」

■

塩田は目を覚ますなり、自分がカーテンで区切られたベッドに横たわっていることに気付いた。そう、塩田がいる部屋は学校の保健室である。
（そうか、僕は人前でチカラを解放しちゃたんだな。はぁ・・・）
するといきなりドアが開き、一人の生徒が入って来た。
「やーやー、気が付いたかい？塩田君。」
入って来た人物は塩田が知っている人ではなかった。ただどこかで見たことはある気がしていた。その人物が誰なのかはわからなかった。

「あぁ、俺様かい？俺様の名前は、五光光一（ごこうこういち）、この学校の生徒会長なんだ。さぁ敬うんだ。ハハハッ」

そう、このおちゃらけた彼がこの桐陵高校の生徒会長である。塩田にとって先程感じた感覚は、相手が生徒会長だからであった。

「一ついいですか？」

「なんだい、迷える塩田君よ？」

「なぜ生徒会長が直々に来られたのですか？」

すると五光は鼻で笑いながら言った。

「なんだそんなことかい。君に用があるからだよ。そのサイコキネシスのね。もったいないじゃないか。せっかくの能力（ちから）をね、こんな風にするんじゃなくてさ、発揮できるところに身を置かないと。」

「ど、どういうことですか！？」

「君さぁ、まだどこにも所属してないでしょ。」

「はぁ？所属って何のことですか？」

「青いね～、別にいいよそういう反応。言い方を変えよう。君のその能力（ちから）を活かしたくないか？」

「・・・たしかに活かせれば活かしたいですけど。」

「とりあえず詳しい話でも聞いてそれから考えてくれればいいからさ。それでどうだい？」

「わかりました。話聞きます。それからその・・・」

「そうそう俺らの組織の名前を言っていなかったね。ようこそ、ＴＥＡＴＲＯ（テアートゥロ）へ。」

「・・・そうだ、大事なこと忘れてたな。先程君が起こした事件は揉み消しておいたから大丈夫だ。」

「なんで先に言わないんですか！」

塩田は思わず五光に突っ込んだ。
「キレがいいねぇ～期待しているよ。」

１４話　事件の収束（後書き）

これで第1章の前編が終わりとなります。・・・といっても後編はバトルシーンばかりでそんなに多くは書かないと思います。

間話　ほむらの忌まわしき過去（前書き）

後藤ほむらのお話です。まだ本編では出てきてはいませんが。

間話　ほむらの忌まわしき過去

私は魔法少女であるのだが、表の顔は桐陵高校の2年生である。そのため毎日学校へ行かなければならない。

はっきり言って面倒臭い。彼女がいなかったら私はとっくのとうに学校に行っていなかっただろう。授業でやる内容は教科書読めばわかるから、やる意味なぞない。部活動なんかは無駄に時間を浪費するだけなので要らない。そもそも彼女が部活動をしていないから私がする意味なんてないのだが。

私は彼女と会うためだけに学校に通っているようなものだ。他の人達は何を考えているのだろうか、疑問に思ったことがある。私自身が“普通”の女子高生ならば今とは全然違っていただろう。しかし、私はもう“普通ではいられない”。あの時から。

私が小学生の頃。私は両親と共にある高級なレストランに行った時のことだ。小さな頃だからただ単にレストランがキラキラしていたから高級なと思っているが、今からでは何だったかはわからない。ひたすら見たことのない料理が出てきたのを覚えている。そしてお父さんがこう言ったのも覚えている。

「これからはこういった物がたんまり食えるんだぞ。」

そう、お父さんが会社の社長になった時だった。お父さんはもちろんお母さんも、そして私もにこにこしていた。浮かれていたのだった。

アレがやって来たのはそのレストランからの帰りだった。家まで運転手つきの車で帰った。私達は家に入った。そしたらアレが、悠然と宙に浮かぶ黒いスーツを纏う男が中にいた。

アレは私達にこう言った。

「幸せそうですね。残念ですがあなたたちの魂を頂いていきます。特に奥さん。あなたが1番おいしそうですね。幸福からの転落、絶望。くくくっ、食べ応えがありますね。」

私達はアレの言っていることを理解できなかった。いや、できるはずがなかった。今の私からしてもアレはめったに見ることができない。なぜならアレは・・・

この世にある全ての鬼の中で1番初めに生まれた7つの鬼：真租の中の第5真租・餓鬼(がき)なのだから。

話を戻そう。その後、真っ先にお父さんが喰われた。心臓を取り出されて。むしゃむしゃと。

次にお母さんが喰われた。お父さんの時よりおいしそうに。くちゃくちゃと。

そして最後は私の番だった。喰われる番だった。

アレは私にこういった。

「どうだい、愛する両親を喰われちゃって。悲しいだろ、悔しいだろ、絶望しているだろ。

ふふっいい顔しているよ。」

私はその時何も考えられなかった。いろいろなことがあって。た

だこれが夢だったらいいのにと思った。

アレが舌なめずりした時。家の中に突如入って来た二人組の女性がいたのだった。

「なんとしてもここで食い止めるわよ。」

「了解です、お姉様！」

不思議な格好をした二人だった。一人はひらひらとしたレースで飾り立てられたドレスを着て、手には先端が光る杖が握られていた。いわゆるアニメなどでよく見る魔法少女だった。年齢は私より少し大きいくらいだった。もう一人の方は西洋甲冑に身を包み、ピコピコハンマーを掴んでいた。二十歳を越えたくらいの妙齢の女性だった。

・・・私は彼女らを見た時、なぜここいるのか疑問だった。その時はすでに感情がごっそり抜け落ちていたけど。私は生存本能でわかっていた。手に負える敵じゃない、立ち向かうなんて自殺行為だ、と。

レースの方が魔法陣を張り、甲冑の方が突っ込んでいく。ピコピコハンマーを携えて。その動きは一つの洗練された舞踏のようだった。

私の目の前で戦闘が始まった。

アレは繰り出されるピコピコハンマーの攻撃をアレは両手でいなしていた。しかし、攻撃の度にピコピコハンマーは徐々に蒼色の光

を伴っていた。
「くっ、なかなかやりますね。対真祖術式ですか、なるほど。やっと開発に成功しましたかな？」
「お前なんかと話す理由はない。」
「おやおや、そうですか。しかし、惜しいですね。これだと私に効かない。せいぜい、かすり傷しか与えられない術式です。もう少し凄いのがくるかと思えば期待ハズレです。そんなものですか、貴女達魔法少女は！」

その時私は、対する甲冑の魔法少女が侮辱されたはずなのに薄ら微笑を浮かべているのがわかった。
「行けっ！吉野ぉぉぉ！」
甲冑の魔法少女は叫んだ。

すると後ろの方で魔法陣を展開していたレースの魔法少女が瞬ゆい光を纏った杖をアレに向けた。
「一桜の花は散り逝くもの、万物に不変は無い（さっさとくたばれ、このくそやろうがぁ）！」
たしかこんな詠唱だったと思う。かなり口汚い印象を受けたから。
杖から桜色に輝く光が放たれた時、甲冑の魔法少女はピコピコハンマーを左から強く打ち付け、その反動でアレの前から避けた。ちょうどピコピコハンマーの攻撃でスタンしているアレに杖から放たれた“魔砲”が当たるように。

そして、その攻撃が当たり、アレの身体の半分を消し去った。
「ぐわぁぁぁ！！！」
アレはくぐもった悲鳴をあげた。
「くそっ、お遊びはここまでだ。『餓鬼道（がきどう）』！」
アレの言葉と共に周りの風景が一変した。まるで地獄絵を見ているかのような風景に変わっていた。

「ちぃっ、厄介な谷だ。手早く壊すぞ、吉野。」
「はい、お姉様。」

二人はそれぞれの方法でその谷を破壊し、元に戻した時にはすでにアレは私達の前からいなくなっていた。

その後の記憶はない。どうやら私は気絶してしまっていたそうだ。
その事件の後、私は近くに住む親戚を頼りそこで暮らしていくことになった。一人の可愛そうな少女として。一人の力を求める魔法少女として。
私はあの後二人に頼んで魔法少女になるやり方を教えてもらい、なんとか魔法少女になることができた。けして魔法少女に憧れたのではない。自分自身を守るためになったのだ。いつまたアレが私に襲い掛かってくるかわからない。だからこそ一刻も早く対抗するすべが必要だった。
私が魔法少女になって二人から戦い方や鬼の性質など様々なことを教えてもらった。今でも二人とは繋がりがある。

そして、自分自身が強くなることだけを考えていたある日、彼女と出会った。

それから私は彼女：九条あかりを守るために生きている。

・・・あかりんラブなんて本人の前で言えないが。

間話　ほむらの忌まわしき過去（後書き）

ちなみに甲冑の魔法少女の名前は白鳥舞（しらとりまい）、レースの魔法少女の名前は染井吉野（そめいよしの）です。

次から第1章後編に入ります。

15話　蠢く闇（1）（前書き）

いよいよ第1賞後編の始まりです。

15話　蠢く闇（1）

アテネ達がクラスメートである能力者と話をしている頃。時を同じくして。

「首尾はどうだい？」

河野香（こうのかおり）は尋ねた。

「やはり反応はありました。場所は校長室から、微弱ですが存在を確認しました。おそらく結界を破壊すれば存在が明らかになるかと。」

対する一人の男はそう答えた。男の名は新川一（しんかわはじめ）。桐陵高校の2年生だ。彼はこの学校に4月に転校してきている。

「ごくろう。大体場所は掴めた。準備も整った。明後日にでも作戦開始とでも行こうかしら。明日は彼女と会うから。」

「それでいいと思います、マスター。」

「こら、学校では私のことは河野先生と呼びなさい。私の名前は河野香なんだから。」

「はい、河野先生。」

「よろしい、じゃ詳しい内容は後でメールするから。」

「わかりました。では、さようなら。」

「気をつけて帰るんだよ。」

新川の姿が見えなくなったところで河野はふぅと息をついた。

「さぁこれからが楽しみだ。」

■

そして次の日。
何事もなく朝が始まった。

「連絡事項は以上ね。じゃあＨＲ（ホームルーム）はこれでおしまい。授業頑張ってね。」

担任である河野香（こうのかおり）は教室を出て行った。

この後の一時間目の授業は理科総合だった。先生は河野だ。そう、妖艶な女教師河野香は化学の教科を担当している。

真理はあまり勉強のできない生徒であるが、理数系の教科に関していえばけして悪くなく、むしろ平均より良い結果を叩き出す。

この理科総合の授業もけして嫌いな訳ではないが、この妖艶な女教師のせいであまり集中することができていなかった。

真理も健全なる男子高校生である。女性の身体に興味がないなんて言えば嘘になる。

だからこそ、完璧なプロモーションを持つ河野の授業を集中して聞くなんて出来ないのだった。これは真理一人に限らない。クラスの男子のほとんどがそうだった。（例外もいる。）

「・・・じゃあ今日の授業はここまで。次までには原子番号５０まで暗記してくること、いいね。」

結局また集中できないまま授業が終わった。

■

「やはり女性の魅力というのは小学生の頃にピークを迎えてそれ

からだんだんと落ちていく。」
例外がいきなり話し出した。彼の名は安部大輔（やすべだいすけ）。変態紳士である。
ここは中庭。アテネ達４人は昼休み、この場所で昼食を取ることになっていた。４人は芝生の上に座ってそれぞれ昼食を食べていた。ちなみにアテネと早苗はマンゴーが練り込まれた蒸しパン、真理と大輔は通常の倍の大きさの焼きそばパンを食べていた。これらは食堂の販売メニューの中の『今週のオススメ』というものを選んだ。
「故に小学生の幼女こそ至高の存在だ。そうは思わないか、真理？」
「いきなり昼休みにそんな話題はやめろ。周りがひいているだろ。」
真理はアテネや早苗が後ずさりしていくのを見て堪らず言った。いくらなんでも真理は特殊な性癖の持ち主ではない。
しかし大輔の口が閉じることはなく、
「今こそ幼女を崇めるべｋ『べこっ』ぐほっ」
熱弁を奮う大輔に早苗は上段から手刀を振り下ろした。手刀であるはずなのだが、大輔の頭頂部から人から鳴ってはならない音がした。
「全くいつから大輔はこんなになっちゃたんだろ。ただの変態じゃない。」
「なんか安部くんの評価が株価大暴落みたいに下がっていくわ。」
アテネは呆れたような表情を浮かべていた。
「いてて・・・おいっ早苗。痛いじゃないか。」
「大輔が悪いんじゃない。変なことばかり言って！」
「不変の真理を述べただけだ。何も俺は悪くない。全く今から思

うと、あの頃の早苗は可愛かったよ。今じゃこんな風になって、幼なじみルートなんて存在しないと思い知らされたぜ。」
早苗の顔が少し赤くなった。
「あっあの頃っていつよ？」
「ん？１０歳頃かな。まさに俺好みっていうロリータ臭(しゅう)むんむんだったな。」
「・・・」

早苗は無言のまま拳を振り下ろした。
ごすっごすっと音を立てる早苗の拳。
「えっ？なんっで？ちょっ早苗さん？止めてくれませんか？痛っいんで。おいっ真理、見てないで助けろよ。」
「今のはお前が１００％悪い。」
「早苗が可哀相だわ、こんな幼なじみで。」

結局、大輔がなんとか謝りその場は収まった。

■

最後の授業が終わり、放課後。
今日は早苗と大輔の部活がないため、４人で帰ることになった。
「どこか寄ってく？」
早苗が話を切り出した。
「いいのか、委員長がそんなこと言って。」
それを受けて大輔はまぜっ返すように言った。
「いいのいいの。そんな規則なんてないし、息抜きにいいかなって。」

「それなら行きましょ。」
アテネも賛同した。
そんな中で、真理は
「ちょっと俺、寄るところあるから先に行ってくれないか?」と言った。

「別にいいけど早めに来てね。」
「わかってる。場所はどこにするんだ?俺はどこでもいいんだが。」
「うんとね、どこがいいと思う?」
早苗は残る二人に聞いた。
「さっちゃんに任せるよ。」
「どこでも構わないぜ。」

早苗は二人の声を聞き言葉を続けた。
「じゃあおいしい紅茶のお店の『アゲトビレッジ』に行ってるからね。」
「わかった。さっさと用事を済ませるよ。」

真理は足早に教室を出て行った。

■

真理が向かって行った先は、校舎の裏側に位置する、通称“憩いの空き地”。
なぜ真理はそんな場所へ行くのか。それは呼び出されたからだ。
昼休みが終わった後、自分の席に座った真理は机の中に入った手紙に気付いた。その手紙にここへ来るように書かれていた。

真理がその場所へ着くと、待ち構えている人がいた。

それは真理のクラスメートの上山優子（かみやまゆうこ）だった。

15話　蠢く闇（1）（後書き）

いきなり新キャラ出しましたが、作中にそれとなくわからない程度に出ています。真理のことをじとーって見ていた女の子です。

16話　蠢く闇（2）（前書き）

やっとこさ上山さんが動きます。

16話　蠢く闇（2）

上山優子（かみやまゆうこ）はクラスの中でもあまり目立つ方ではなく、どちらかと言うと地味な部類である。髪は黒々としていて腰まで届く長さだ。顔はまさに大和撫子で日本的だ。あまり人と話さなく、友達も少ない、そんな真理のクラスメートだ。

彼女と真理とはほとんど接点がなく、これが初めて話すことになるのだった。

「上山さん？」

真理は予期もしない人物が現れたため思わず聞いてしまった。

「はい、お待ちしていました。神内さん。」

どうやら彼女が真理を呼び出したということがわかった。

「教室ですと周りの目が気になって申し上げにくいのでこの場所まで来てもらいました。」

「申し上げたいのはですね・・・ん、ん。」

上山は声の調子を整えた。真理には彼女がこれから大事なことを言うのだなと思った、何やら自分に関係があることの。

「この学校に入ってからずっとあなたのことが気になって見ていたのですが、この気持ちが抑えられなくて。」

「・・・」

真理は何も言うことができなかった。自分の予想が当たっていたことに密かに喜ぶ反面、なぜ自分なのだろうかと疑問を感じていた。真理自身、自分の顔は平均的であると思っている。取り立てて不細工ではないがだからといって人目をひく訳でもないだと思っている。

「だから、」
そして上山優子は言った。

「死んでください。」

そう言うなり、手に持ったナイフのような鋭利なもので切り付けた。その鋭利なものは深い闇の如く黒光りしていた。
彼女が切り付ける軌道は真理の体の中心を捉えていた。だが、しかし真理は何も考えず、ただその直感のままに避けた。結果その斬撃は何も切り裂くことはなかった。上山は勢いのまま少し離れたところに立った。

「改めまして、神内さん。私の名は上山・フラジール・ユーコです。以後よろしくお願いします、とは言いましてももうお会いすることはないのですけど。私のことはユーコと呼んでください。」

彼女はトンッと足を踏み鳴らした。すると上山と真理の周りの風景が突如として深い森に変わった。
真理には今の言動と上山優子との繋がりを理解することができなかった。真理の知る上山という人がいきなり切り付けてくるとは想

像もつかなかった。だがこのような空間は見覚えがあった。何やら得体のしれない感じ、浮遊感、時間感覚が狂いそうな感じ・・・・・・

「そうか、今俺は“谷”にいるのか。これはお前が作ったのか？」

真理は問い掛けた。

「さすがですね、神内さん。見ただけでわかるとは。そうです、これは私が作った谷です。名は“蠢く森”です。自信作ですよ。」

「この後約束がありまして、あまり時間もないです。ですから、手早く殺りますね。」

再び斬撃が真理を襲う。この時の上山の動きはすでに人間のそれを越えていた。その動きを捉えることは人間には難しい。

何度も繰り返すことになるが、真理はただの人間ではない。内に秘める力がある。それはただ魔法を弾くだけの力ではない。むしろそれは真理の持つ力の一端である。真理には他人とは違う能力がある。それは目である。これは目に映るどんなに速く動くものでもその動きを捉えることができる。

その目のお陰で真理は傷一つ負うことなく避け続けることができた。まだ今のところは。

（どうやってここから出れるんだよ。最悪ここで死ぬしかないのかよ。）

「何で避けるのですか？」

「いや普通避けるだろ!!こんなところで死にたくねぇーし。」
「面倒なので諦めてください。」
「だいたいなんで俺が狙われているんだ?」

すると上山は呆れたかのような表情を浮かべた。
「神内さんは自らの存在について何も知らないんですね。はぁ、いくらなんでもなぜ狙われるのかわかっているかと思っていたのに。」
「・・・どういうことだ?」

「ではこう言えばわかりやすいですね。神内さんが竜崎さんと共に倒したデュナミスの仇です。
少し違うのですが、大方そういう理由です。」
「・・・そういうことか。お前もやっぱり鬼か。じゃあ、お前とデュナミスの関係はなんだ?ただの同類(おに)同士だからって訳じゃないだろ。」
「ふふっ。デュナミスは私達の同志でした。もうお後はよろしいですよね。この谷は中からは絶対に抜け出ることができないのですから。神内さんはここで受け入れる他(ほか)ないのですよ。」
「事情はだいたい掴めた。俺がどれだけの危機にあるかもわかった。」

「なら、さっさと諦めて死んでくれませんか?今なら痛くないようにしておきますので。何なら男の子が好む奉仕でもしてあげましょうか。冥土の土産にそれくらいしてあげますよ。私の相手(もの)になってくれませんか?」

その言葉に真理は、

「断る。」
と言った。

「仮に俺がここから抜け出ることができないとしても元の場所に戻る方法があるはずだ。俺は諦めない。」
「いつまでもそんなこと言うと私にも考えがあります。」
「それでも俺はここから出る方法を模索し続ける。お前に殺されることなく。」
「ふふっ。」

突如、上山の黒く長い髪が自ら意思を持ったように動き始めた。
「!?」
「では始めましょうか。」
上山の髪が真理の左右から襲い掛かる。いくら真理が“動き”を捉えることができるとはいえ、こういった避けるのが不可能な攻撃に対して無力だ。
真理は髪に捕われ身体を縛り上げられた。手を振るうものの効果はなかった。そしてそのまま持ち上げられた。

「気分はどうですか、もうすぐ死ぬ気分は?」
「・・・」
真理は何も答えなかった。

「では、さようなら。」
真理を縛る髪が真理の身体を握り潰し、別の髪が真理の首を切り落とす。

そしてボトリと落ちる音がした。

16話　蠢く闇（2）（後書き）

さて、何が落ちたのでしょうか。答えは17話でわかります。

17話　蠢く闇（3）（前書き）

すいません、更新がだいぶ遅れました。
これでやっと蠢く闇が終わります。

17話　蠢く闇（3）

そう、何か大きなものが落ちる音がした。
しかし、真理の首が落ちた訳ではない。真理が地面に落ちる音だった。

「まったく死ぬところだったぜ。」

上山の髪は途中で切断されていた。切り口のところは焼け爛(ただ)れていた。

「!?なぜ・・・」
真理は呆然とする上山には目をくれなかった。

「少し遅れたら首が取れていたんだからな、早苗。」
「そんなことは絶対にさせないから大丈夫だよ。」
真理の隣に立った早苗は当然のように言った。
早苗は巫女服を纏い、金色に光る太刀を右手に持っていた。

「さて、上山さん。あなたは何をしたいの?」
「ええ、私の目的は神内さんを殺すことですよ。それ以外ありませんわ。」
「なら、ここであなたを倒す。」

早苗は上山に向かって走り出した。上山はさらに長く数多くした

髪の毛の束で早苗を殴り付ける。早苗はそれらを魔法で迎撃する。
「『雷撃（シングルショット）』高速展開！」
早苗に襲い掛かる髪の毛の束が次々と雷に撃ち落とされ動きを止める。早苗は動きを止めることなく上山に肉薄する。
「喰らえ！」
早苗は太刀を鞘から抜きながら切り付ける。刃は電撃を帯びて金色に光っていた。

その斬撃を上山は避けなかった。刃は上山の身体の中に埋まり、雷撃がその肉体を焼き焦がす。上山は微笑を浮かべたままだった。

そして、早苗は横から来た攻撃を喰らい吹き飛んだ。

「くっ・・・」
早苗は地面に転がった。起き上がろうにもうまくいかなかった。それもそのはず。早苗の身体は黒い靄（もや）に包まれていたのだった。
地面に崩れている傍らに上山は立っていた。
「・・・今のは何なのよ?」
「今のはあなたの動きを封じるために拘束系の鬼道（きどう）を。先ほどのは幻影ではありません。言ってみれば私の影武者でしょうか。」
「うまく嵌められってわけね・・・」

上山は言った。
「さて、まずあなたから消えてもらいましょう。そこの魔法少女さん。さようなら。」

上山の髪は鋭く尖った錐のような形状をして早苗の身体に狙いを

つけた。

「悪いけどね、」

唐突に早苗は話し始めた。

「ここでむざむざとやられるほど弱くはないので、ね。」

魔力が早苗を中心に集まり始めた。

「私の拘束系鬼道『瘴気の霧』から逃れるのは無理ですよ。」

「いや、私にはできるんだよ。

我の魔力を喰らいてここに顕在せよ！『紫電（しでん）の翼』！」

魔力が雷でできた翼を構築し、周りに電撃を放つ。ある電撃は早苗に纏わり付く霧を払う。ある電撃は上山に襲い掛かる。

この『紫電（しでん）の翼』という魔法は、使用する術者（この場合は魔法少女のこと）が身体の中心に魔力を溜め、そこから翼を構築するため、ちょうど術者の背中から白い翼が2対生えているかのように見える。また、翼から放つ雷撃によって術者からはオーラが漂う。その姿に見えるため、この魔法は「天使」とも呼ばれる。破壊力も充分である。見上げるほどの岩であっても翼を2、3回振るうだけで粉砕することができる。この魔法は優秀であるが、それだけ行使するのに大量の魔力と精密な制御が必要である。間違っても自らを傷付けないようにして敵に的確に攻撃を与えるためだ。

「こう見えても私は結構強いからね。」

早苗は紫電の翼を振るう。上山は髪の毛を集めて盾とするが、所詮髪の毛は髪の毛でしかないため焼き焦がされた。しかし、さすがに量が量なだけに一撃では焼き切ることができなかった。

「くっ、もう全力を出すしかないですね・・・」
上山はそう言うなり今まで盾としていた髪の毛を解いた。そして今まで伸びていた髪の毛を元の長さまで戻した。

「先生、すみません。
もうこれで終わりにします。
起動『黒髪幻想（くろかみのおんなのこはゆめをみる）』」

早苗の背中から出ていた電の翼が消し去られていた。また、周りの森のざわめきが一層強くなった。蝉のような鳴き声から鈴虫のような鳴き声までした。そんなざわめきは戦っている早苗や脇に避けている真理をいらつかせていた。
そんな中、当の張本人である上山は涼しい顔をしていた。

「さぁ踊りなさい。」
地中から黒い物体が飛び出てきた。それは長く太く、まるで黒いミミズが襲い掛かってくるように見えた。
それは無秩序な動きをしながら早苗に迫り来る。

「面倒ね・・・六連星（むつらぼし）一の太刀。」

早苗は鞘に手をかけた。するやいなや目に見えない速度で斬撃が繰り出される。その斬撃は迫り来る黒い物体の突撃を止めることはできなかったものの、その進行方向をずらした。
進行方向のずらされたそれは見当違いの方へぶつかっていった。

「そして次。二の太刀。」
早苗の何も持っていなかったはずの左手には魔力で構成された刀を握られていた。

本来魔力を使って物体を構成することはかなり難しいことだ。なぜなら不安定なガスのような魔力を物体に変換させるには、魔力の放出・制御・固定といった過程が必要である。これらは並の魔法少女が行える訳でない。

「さて、終わりにしようか。
轟け！風を伴いて我を運べ！『疾風迅雷』！」
早苗は二刀を構え雷を纏って上山に突撃した。

「エターナルオメガスラッシュ！（※1）」
（※1：「魔法少女まどか☆マギカ　アンソロジー」の中に元ネタ。）
早苗は二刀を十字にクロスさせ一撃を叩き込んだ。その一撃は上山の身体を爆散させた。

「終わったのか・・・？」
「そうね。これで終わりだね。」
「助けてくれてありがとな。あの時助けてくれなかったら俺は死んでいたな。」
「まったく探したんだからね。」
「すまなかった。まさか呼び出されてこうなるとは思わなかった。」
「次からは気をつけてね。どうやら真理は狙われているようだから。」
「全くだ。
そういえば竜崎と大輔は？」
「たぶんこの“谷”の外で待ってるんじゃない？」
「そうか。」

「いつになったら外に出られるんだ?」
「おかしいね・・・」
早苗は何かに気が付いた。
「・・・っ!出て来なさい!」

まだ解けていない“谷”の中にある森の奥からゆらりと陰が現れた。それはやがて人型を取り姿を表した。
「かみや・・・ま?」
「上山さん、あなたですか。」

そこにいたのは傷一つついていないピンピンの上山・フラジール・ユーコだった。
「主人公は何度だって生き返る!そう、私はこの物語の主人公なのだから!」
上山は歓喜の声を上げながら歩いてきた。どうやら復活してテンションが高くなっているようだ。
「私こそ正義!あなたたちは悪!正義によって裁かれるだけの虫けらなのですよ!」

早苗は顔をしかめた。
「言いたい放題いいやがって・・・復活するなら倒しようがないじゃない。」

上山は口上を続ける。
「私こそが主人公なのよ！」

そこに割り込む声がした。
「あんたは主人公なんかじゃないわ。私が主人公なんだよ！」

バリバリ
鏡が割れるような紙が破かれるような音がして、一人の少女が真理達の前に姿を現した。

「私の名は竜崎アテネ。あんたを狩りにきたわ。」
アテネがそこにいた。

「あら、竜崎さん。何の用かしら。まぁいいわ。あなたもまとめて始末してあげる。」
「ふんっ、雑魚のくせに。」
アテネの右手に魔力が集まる。
「さて、この舞台から壊そうか。」
アテネは詠唱を開始する。
「―此の場所を我の領域と仮定する（ここはわたしのにわなんです）。―景色にそぐわぬものを消し去り浄化する（ごみはごみへさっさと捨てましょう）。いざ、元に戻れ。我が心の故郷（マイホーム）よ。」

その瞬間。辺りは瞬ゆい光に包まれた。光に視界を奪われる直前、真理は辺りに広がっている森が崩れ去っていくのが見えた。

光が消えるとそこは、そよ風が吹く平原だった。
「まさか・・・私の“谷”を消し去った訳！？」
上山が目の前の光景に思わず大声を出して叫んだ。
「ただ単に私の結界を上書きさせただけだから。まぁこれであんたはもう復活できない。攻撃手段も制限された。逃げられない。さぁ、どうする？」
アテネが主人公（自称）らしかぬセリフで上山に迫る。

「わっ、わたしは・・・・・・

ハハハッ、決まってるじゃない。貴様を先に潰す。」

上山の顔はすでに以前のおしとやかな表情の原形を留めていなく、鬼の形相だった。
上山は自らの髪をドリル状にいくつも束ね、アテネに突撃した。

「まぁここで逃がすつもりはなかったから手間は省けたけど。グリフィン！」
アテネは手に鎌を呼び出した。

二人は激突した。上山は髪を突き出す。アテネはそれを鎌で裁きながら攻撃を加える。
「わたしはなァ、ただの鬼なんかじゃねェンだよ。魔女なんだよォ！どうだビビったかァ！」
「その割には弱いね。そうか、あんたは成り立てね。だからこんなに雑魚なのね。まるで序盤にでてくるやられるだけの中ボスね。」
「なんだとォ！」

「さぁ喰らいな！」
アテネは鎌に魔力を送った。魔力を受けた鎌：グリフィンは相対する上山の髪一束を消し去った。
グリフィンの勢いは止まることなく上山を切り裂く。

「ぐはっ」
上山は口から血を吐いた。

アテネは構わず畳み掛けた。
「障害（ごみ）も構わず吹き散らせ。裂空波（エアロブラスト）！」
突き出した左手から風の奔流がほとばしり上山の身体を貫いた。
そして上山は散り散りになり光の粒子となって消え去った。

「そしてこれで本当におしまいだね。」
アテネは言った。
「そのようだね。ありがと、あーちゃん。」

「さて、元の場所に戻ろうか。」
アテネが右手を伸ばし詠唱する。
「我が故郷（マイホーム）解除。」

周りが光に包まれた。

17話　蠢く闇（3）（後書き）

なんとか第1章が終わるように頑張っていきたいと思っています～
誤字脱字等ありましたら連絡ください！

18話　喫茶店で一息（前書き）

お久しぶりです。今回はつなぎのお話です。かなり話が飛んでいますが・・・

18話　喫茶店で一息

「さて。」

ここは校舎の裏側に位置する、通称“憩いの空き地”。上山・フラジール・ユーコとの戦いの後。空は夕陽で橙色に染まっていた。

「とりあえず『アゲトビレッジ』に行こうか？」
とアテネが言った。

「そうね、行きましょ。」
と早苗が言った。

「いや、先にスーパーに行かないと特売が・・・」
と真理が言うものの
「「いいから着いて来る！」」

二人の一喝に真理の意見は封殺されたのだった。

■

「そういえば大輔はどこにいるんだ？」
「まだあそこにいるんじゃないかしら。

さっちゃんが行った後、『俺がここにいるから早苗と真理のこと見てこい。厄介事に巻き込まれるから。』って言っていたし。」
「大輔らしいセリフよね。」
「あぁ確かに・・・ん？」

真理は何かに気がつき目の前を凝視した。
「どうしたの？真理。」
「あぁ、いやあそこに俺の母親がいるように見えて、な。あれ、見えなくなった。」

「真理のお母さん、結構忙しい人だよね。」
「忙しいっていうか、なんだろうな。よくわかんない人だ。」
真理はそう答えた。

あと少しで『アゲトビレッジ』に着く。

■

喫茶店『アゲトビレッジ』は、商店街の場末の、住宅地と接した位置にある。
その上、店は普通の2階建ての木造家屋で、さりげなく上に看板をぶら下げているだけで、知っていなければそこが喫茶店だとはわからない。
そのためこの店には常連客しか来ない。たまに雑誌を片手に来る観光客もいるが。

この店の看板メニューはチーズケーキだ。チーズの香りがあまり

強くなく全体的にすっきりとした味わいになっている。
重くなく、値段がお手頃なため、来る客のほとんどが来る度に頼んでくるほどだ。
たまに雑誌にも取り上げられる。

「おっ！来たか。」
店の奥に大輔が座っていて、声をかけてきた。
ちょうどこの夕方の時間は客が少なく、大輔の他誰もいなかった。

「待たせたな、大輔。」
「おう、無事だったか？災難だったな、まさか上山（かみやま）が鬼だとは思わなかったな。」
「あぁ、早苗と竜崎のおかげでなんとか無事だ・・・
ちょっ待て。なんで俺が危ない目にあったのか知っているんだ、大輔？見てたのか？」

大輔はにやにやしながら首を振った。
「だって俺はずっとここにいたんだぞ。」
「じゃあどうやって・・・」
「私も気になるわ。教えてくれる？」

大輔は間を取り、そして話し始めた。

「そう、前に俺は協力者（サポーター）だって言ったよな。竜崎さんは知っていると思うが、一人の少女が魔法少女になる時に、その少女は誰でも一人だけ自分を支援してくれる人を選ぶことができる。その人は魔法少女には到底敵わないが力を手に入れることができる。これが協（サ）ポーター

力者だ。」

「確かにそんなことも言ってたね・・・まぁ、私はその時独りだったからね。」

「そうだったんだ、竜崎さん。で、俺は早苗の協力者（サポーター）となった訳だ。」

「つまり協力者（サポーター）の能力（ちから）かな？」

「さすがは竜崎さん。

真理、着いて来れているか？」

真理はやや疲れたように言った。

「なんとかな・・・」

「で、俺の手に入れた能力（ちから）は式神を行使すること、これだ。」

「「いや、そんなドヤ顔されても・・・」」

「・・・」

大輔は悲しい目をしていた。

「で、その式神で私達の様子を見ていたという訳ね？」

「そうだ。俺は目を閉じることで、式神の目とリンクすることができる。

だから式神を飛ばしさえすれば様々な景色を見ることができる、そういう訳だ。」

「大輔・・・変なことには使ってないだろうな？」

真理が尋ねた。

「・・・そんなこととしてニャイ。」

「「あっ噛んだ。」」

「大輔のことだから覗きとかしてるんでしょ？」

「もういいだろぉ早苗ぇ～勘弁してくれ。はい、違う話。」

大輔の下手な話の切替に3人は苦笑しながら許した。

「今回の鬼なんだが、なんか様子が違うように思えてな。実際戦った感想はどうだ？」

「そうね、私から見たらかなり強く感じたね。あれだけの力は久しぶりに見たね。あーちゃんは？」

「・・・・・・」

アテネは何か考え込んでいるようだった。

「どうしたの？あーちゃん？」

早苗が尋ねるとアテネはやっと顔を上げ答えた。

「上山はただの鬼なんかではなかった。あれは魔女だった。」

「「「！？」」」

3人は思わず息を呑んだ。

「魔女って竜崎が追っている奴だろ。」

「やっぱりこの地域にも魔女がいたのね・・・」

「だが、今回倒したんだから・・・」
3人はそれぞれの反応を示した。
アテネは言葉を続けた。
「だけどあれは私が追っている魔女じゃない。上山はまだ成り立てだった。
これからが問題よ。魔女(ほんめい)があの桐陵高校を襲ってくる。」

「「「・・・・・・」」」

「私は隠された秘宝を奪われる訳にはいかない。そのためにここに来たのだから。奪われないためにどんな犠牲を払ったとしてもいいって思っていた。例え学校の生徒が殺されたとしても。

そうだったんだけど、あなたたちに会って目的が少し変わったわ。魔女(ほんめい)は秘宝を手に入れるためなら学校を本気で潰しに来る。だけど私はこの場所を荒らされることを防ぎたい。

そのために手伝ってくれる?」
アテネは3人に聞いた。

「もちろんだぜ、何を言っているんだ竜崎さん。手伝うのは当たり前じゃないか。」
「そうだよ、あーちゃん。この地域を荒らす魔女なんて見逃す訳ないじゃない。」

大輔と早苗の二人はそう答えた。

「・・・力になれるかわからないが俺のできる限り手伝ってやる。心配するな、竜崎。」

真理はそう答えた。

「ありがと、みんな。」

間話　ほむらとあかりの出会い（前書き）

今回はほむらについてです。

間話　ほむらとあかりの出会い

私：桐島（きりしま）ほむらは今から2年前に桐陵高校に入学した。入った時から学校には期待していなかった。授業には全く興味はなかったし、“仕事”のせいでほとんど時間がなく、友達なんて出来ないと思っていた。

そして予想通り平凡極まる1年が過ぎ（知り合いはいくらか出来たが）、2年になりクラス替えがあった。

新しいクラスになり、初めて彼女を見た時に驚いた。いや、驚いたという言葉は適切ではないかもしれない。一目惚れとも違う。その彼女の纏う雰囲気に惹かれた。

これが彼女：九条あかりとの出会いだ。

■

それからというものの、彼女とは友達になった。出席番号順に並ぶ席が前後だったため、話せる機会が多くすぐに仲良くなれた。彼女からは何か精神を安定させるような波動が出ていた。

今まで友達を作ることの出来なかった私にとって、彼女と友達になるということは新鮮な体験だった。いつも脇からしか見ることのできなかった友達同士の馴れ合いをすることが出来た。

いつしか二人で互いの身の内話をするようになった。

・・・はっきり言って自分から身の内を話すのはこれが初めてだ

った。大体両親が死んだ理由をおおっぴらに話すことはできない。誰が鬼に喰われましたっていう話を信じるだろうか。否、いないだろう。信じるのはそれが魔法少女関連の人か、もしくはそれが鬼なら信じるだろう。両親は表向きは、家の中にいた強盗犯達と遭遇してそのまま連れ去られ消息を絶ったということになっている。

私はそんな身の内話を表向きのそのままの形で話した。彼女はそれに対して、微笑み、そしてこう言った。互いに辛かったんだね、と。

その後、彼女の身の内話を聞いた。

彼女には母親がいない。彼女が生まれて間もないころに死んだそうだ。それから父親と二人で暮らしているようだ。早くに亡くなった母親から遺されたブローチを肌から離さず持っている。

そのブローチを見せてもらった。そのブローチは真ん中にアメジストをあしらっていて紫色に輝いていた。そして中からは少量であるが濃密な魔力が感じられた。

■

それから幾許か経って。

私と彼女が一緒に学校から帰る時だった。その日は互いに用事があり、帰る時間が遅くなっていた。

外は、桜の木が葉桜に変わっていて、それらが夕日に照らされて橙色を帯びていた。

「夕日って見てると何か悲しくならない？」

彼女が唐突に言った。

「そうだね。一日がもう終わるって感じだね。」

私はそう返した。
私と彼女の会話はそうそう長続きしない。それでも私は彼女と話している間が一番好きだった。

「夕日はいらないことまで思い出させる。だから好きじゃない。ほむらはどう？」
「そうね。私もあまり好きじゃないよ。」
「そっか。」

夕日が私達を照らしていた。

そして私達が路地に入ったところで彼女との穏やかな時間が終わりを迎えた。
そこには鬼がいたのだ。

その鬼は、赤鬼の姿をしていた。手に金棒を持ち、筋肉隆々とした姿を見せていた。

私は側にいた彼女が鬼を見て気絶したのを見て、彼女を抱き寄せほっとした。彼女に記憶操作の魔法なんて使いたくなかったからだ。

私は鬼に向かって話し掛けた。
「ねぇ、そこの鬼。通らしてくれないかしら。」
「何言っているんだ小娘。オイラは腹が減っているんだ。獲物は逃がさんよ。まして小娘は魔法少女なんだろォ。オイラと闘うべ。」
「せっかく友好的に持ちかけているのに、そこの鬼と来たら空腹の戦闘狂（バトルジャンキー）なのね。全く虫酸が走るわ。」

私はそう言うと共に、服を魔法少女のそれへ変化させた。
私の魔法少女の服は朱に染まる浴衣だ。所々に金色であしらっていて気に入っている。ただ残念なのはこの服装の時は鬼との闘いの最中だということだ。

「汚れたものを断ち切れ。『炎剣（えんけん）』」
私の詠唱に呼ばれ炎から成り立つ剣を生み出す。私はそれを掴み右手で構えた。この剣は敵意を持つ者に反応して炎を燃え上がらせる。一方で敵意を持たない者にはその熱さは感じられない。彼女は私の左腕の中で気絶したままだった。

「掛かってきなさい。」
「ウォォ」
赤鬼は金棒を振り上げ襲い掛かってきた。その一撃は力強く、喰らえば魔法少女になっている今でさえ命を落しかけないものだった。私はそれを避け、赤鬼の身体を右足で蹴りつけた。そして詠唱した。
「飛べ！」

赤鬼はそのまますっ飛び、近くの空き地に飛び落ちた。
私は隅に彼女を下ろし、後を追った。

私が空き地に着くと、赤鬼はひっくり返っていた。突き出たままの尻に向かって剣で切り付けた。
赤鬼はその一撃を受け、体勢を立て直し金棒を構えた。

「今まで喰ってきた小娘達はそんなことしてこなかったんだがな

ァ。」

「単純な魔力による身体強化よ。さっさとぶっ潰れてくれない？面倒くさいんだけど。」

私は言った。

「そういえばそこの鬼。第5真租の餓鬼って知ってるかしら。私、そいつに会いたいんだけど。」

「!？なんだとォ・・・会うなんてそんなこと無理だ。オイラ達でさえ会ったことすらないんだからヨ。そもそも会いたいって奴初めて見たぜ。」

「知らないならいいわ。さっさと終わらせましょ。我の生命（いのち）を喰らいて、ここに現出せよ。『火炎処女（フレイム・メイデン）』！」

そこに焔を纏う一人の少女が現れた。

私の魔法『火炎処女（フレイム・メイデン）』は分類でいえばゴーレム生成魔法だ。だが、ただのゴーレム生成ではない。ゴーレムは基本的に術者の命令を逐一聞いて動くが、私の『火炎処女（フレイム・メイデン）』は基本的に自律型だ。自分で戦況を見て自分で適切な攻撃を繰り出す。さらに『火炎少女（フレイム・メイデン）』は手から炎の球を出し投げ付けたり剣で切り付けたりすることができる。その一撃一撃は私の使う魔法攻撃を凌ぐ強さを持つ。

焔を纏う少女はその金色に光る目を赤鬼に向け、手を振り上げた。手には燃え盛る炎の球体が出番を待っていた。

「なっなんだそれは！」

「良かったね、消える前に私の『火炎処女（フレイム・メイデン）』を見れて。すぐに楽

にしてあげるよ。」
「やめろォォォ！」

焔を纏う少女は無慈悲に手を振り下ろした。
手から離れた炎の球体は赤鬼の胸部分に当たり、身体の中心を穿った。そしてその炎は赤鬼の存在を焼き払った。

■

「ふぅ。」
私はそっと溜め息をついた。『火炎少女（フレイム・メイデン）』を使うには多くの魔力を使うのだ。
「さて。」
私は道端に置き去りにしてしまった彼女を探して家に帰るため歩き出した。

彼女を見付けたが依然として気絶したままだった。だから私は彼女を抱えたまま、とりあえず自分の家に連れていくことにした。

少し歩いた所で彼女は気が付いた。
「うっ・・・ん？」
「気が付いた？」
「あれっ私・・・」
「いきなり倒れたからびっくりしちゃったよ。大丈夫？歩ける？」
「うん。大丈夫。」

彼女は私の方を向いた。
「助けてくれたんだよね。ありがと。」
「いいっていいって。早く帰ろ。」

「そうだね。」

私と彼女は二人で歩き出した。

そして彼女は唐突に言った。

「私はいつも守られてばかり。本当にそれでいいのかなって思う。私は守られるんじゃなくて誰かを守る人になりたいなって思うの。」

「あかりはそのままでいいんだよ。」

私はそう返した。

「私は自分自身に災厄が降り懸からやすい存在なんだよ。そのせいでお母さんは死んだ。それでもほむらちゃんは守ってくれるの？！」

私は彼女の母親が魔法関係者で、娘のことを今でも守っているのだと悟った。

彼女のその言葉に私は、

「何があってもあなたを守る。だから安心して。」

と言った。

「ありがと、ほむらちゃん。」

彼女は微笑んでいた。

間話　ほむらとあかりの出会い（後書き）

次からはようやく1章のクライマックスへと突入します。

１９　話　覆われる闇（１）（前書き）

いよいよ話がクライマックスへと動き出します。

19　話　覆われる闇（1）

そこは『常盤（ときわ）の森』の中心部。とっくのとうに日は沈み、悪鬼夜行が蠢（うご）めく夜。

そんな中一人の女性が立っていた。彼女の名は河野香（こうのかおり）。桐陵高校の教師だ。

河野は中心部にある大樹に辿り着くと、手をついて息を整えた。

本来この『常盤の森』には人は来ない。来るのは酔客な人か自殺願望を持った人だけだ。

河野は大樹に向かって話し掛けた。

「どうも目覚めていますか？『常夜の姫君』」

少しして声が返ってきた。

「なんだ、わらわに用か？『水蛇（すいだ）の女王』」

「本題からずばり言いますと、ちょっと暴れてみませんか？」

「ふふっ。面白そうではないか。もっと話を聞いても良かろう。話してみぃ。」

「貴女ならそうと言うと思っていました。

具体的に言えば、今日の昼にこの近くの桐陵高校で大暴れ、っていう話です。別に何しようが構いません。」

「そうか、なら一つ聞こうか。そなたの目的は何だ？単にそなたも暴れたい訳じゃなかろ。」

「・・・貴女の慧眼には恐れ入ります。私の目的はただ一つ。そこに隠された法具を手に入れること。そのために陽動が必要なのです。どうですか、報酬が必要ですか？必要なら用意しますが。」
「いらん。暴れられるなら構わない。」
「そうですか。なら時間になったら私の使いがここに参りますから、そうしたら使いに着いて指定の位置まで来て下さい。」
「面倒だ、今から案内せい。」
「わかりました、参りましょう。」

皆が寝静まる丑三つ時。人が立ち入ることのない森の中から、一人の女性と一人の少女が出て来た。底の見えぬほどの闇を纏いながら。

■

次の日。真理とアテネは朝いつもの光景を繰り広げていた。

「おい、こら。寝るな。遅刻するぞ。」
「あと・・・5分・・・」

アテネが朝ごはんを食べた後、ダイニングテーブルに突っ伏して寝惚けていた。

「仕方ない、アレを使うか。」
真理はそう言うなり、冷蔵庫の中にあるものを取り出した。
「ちょっと口開けろ。」

「ぅんっ・・・」

アテネが言われるままに口を開け、その中に赤い物体が放り込まれた。

「口を閉じてろ。」

「ん？・・・んんん！？」

アテネは苦悶の表情を浮かべ口を開けて異物を出そうとした。

「待て。食べ物を粗末にするな。しっかり食べろ。」

「う〝っ、ぅううーん！！」

「わかったわかった、これで目が覚めただろ。ほい、水。」

アテネは出された水を一気に飲み干した。

「はぁはぁ、死ぬかと思ったわよ。」

「大丈夫大丈夫。キムチごときで死ぬ人いないから。」

「きっ、キムチ？」

「そう、キムチ。この前買ってきたキムチ。」

「なんてもの食わしてんの！」

アテネはこぶしを振りかぶって真理にアッパーをかました。

真理は吹き飛んだ。

「ぐはっ」

「私がキムチ嫌いなの知っているじゃない。」

「わかったわかった。悪かったって。」

真理は殴られた胸を押さえながら謝った。

「まったく。何してくれてんのよ。」

「わかった。後でケーキ買ってきてくるよ。」

「じゃ『アゲトビレッジ』のチーズケーキね。」

「はいはい。」

「それにしても朝からアレは最悪だったわ。」
「だけど目が覚めたから良いじゃないか。
遅刻しないで済む。良いじゃないか。」

「全然良くない！」
真理は再び吹き飛んだ。

■

「いててっ・・・」
「真理が悪いんでしょ！」
「いや、竜崎が寝惚けるからだろ。嫌だったらさっさと起きろよ。」

「それは無理。
ねぇ。もう少し優しくしてよ。」

アテネは瞳を潤ませて真理を見上げた。
「優しく、して。」

「うっ・・・」
真理は不覚にもアテネのことをかわいいと思った。アテネはかなりかわいい顔立ちをしている。学校でもトップ１０には入っているだろう。そんなアテネが普段見せない仕草をしたらどうだろうか。

「・・・・・」
「ってどう?私のことかわいいって思ったでしょ。」
「はぁ?」

「ふふふ、私の手にかかればアンタなんてイチコロよ。」
「・・・・・・」
「なんでそこで視線が冷たくなるのよ。そこはハハァーって土下座するところでしょ。ねぇ、ねぇってば。」
「なら、一言言わせてもらうが。」
真理は間をおいて叫んだ。
「俺を弄ぶな！」

■

なんだかんだあり、二人は教室に着いた。
「疲れたー」
「今から疲れてどうするのよ。ほら、しゃきっと。」
「お前が言うな。」

二人が話しているところに割り込んできた人がいた。小林レオだった。
「相変わらず仲良いな、お二人さん。付き合ってんの？」
「「なっ！？」」
二人は飛び上がって驚いた。

「何言ってるの、小林くん！」
「ほらほら、言っちゃいな、付き合ってるのかどうか。」
「俺と竜崎はそんな」
「べっ別に真理とは何もないんだからね！」

真理はアテネを見ながら、なぜアテネが慌ているか、ふと疑問に思った。

「まったくあの二人は。」
「なぁ早苗。次の授業ってなんだっけ？」
「一時間目でしょ！それぐらい覚えておきなさいよ。数？だよ！覚えた？」
「ほんと、ありがとうございます！」
「はぁ。大輔ったら。」

■

いつも通りの一日が始まろうとしていた。互いにふざけたり言い合ったりして始まり何の不幸にも出会わないそんな日常。
だがしかしそれは大いに裏切られることとなる。アテネにとって想定された待ち焦がれた戦闘。早苗にとって仲間達を守るための戦い。同じ学校にいるほむらにとっては自分と一人の少女に降り懸かる災厄を振り払うだけの防衛。
そしてその瞬間、戦いの火蓋が切って落とされることとなる。

午前中の授業がそろそろ終わり昼休みに入るその時。
真理は四時間目の保健の授業をぼんやりと過ごしていた。

「・・・ということでして。あぁ、もうお昼なんですね。
じゃ今日の授業はここまで。はい、号令。」
こじんまりとした体格の女性保健教師は生徒に号令をかけさせた後そそくさと教室を出て行った。

時計の針が１２：３０を指し示した瞬間、四時間目の終了のチャイムが鳴る代わりに爆発音が鳴り響いた。

19　話　覆われる闇（1）（後書き）

何か意見・質問などありましたら、教えてください。評価やコメントをくれると喜びます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8669s/

鬼狩りのアテネ

2011年10月26日09時12分発行